

俳句雜誌

令和八年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九卷第五号

水 明

2026 5月号



《今月のかな女》

春曉の障子に藤のうつりけり

〔龍膽〕〔雨月〕所収 昭和四年

長谷川かな女

かな女は、昭和三年の十一月に、永年暮らした東京を離れ、浦和に居を移した次第であるが、本句の藤が何処にあつたものなのかが明らかでない。作句年はともかく、柏木の家なのか浦和か、それとも全く他所のものなのだろうか。何れにせよ、春曉という言葉から、床の中で寝覚めに見た光景ではと思う。藤の名所のような長大な房ではなからうが、早曉のそよ風に揺れる藤花はなかなか風雅なものである。春曉と藤が季重ねになつていますが、そんなことには頓着しないかな女らしさが出ている。「藤」が主たる季語なのは言うまでもない。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

決め球はスローカーブや草青む

石井喜恵

季音月

青饅やあくまで青き最上川

大場順子

季音花

友禅を晒す水音雪催

池田珪子

水明集

廃道に庚申塚の凍つる後夜

皆川更穂

山紫集

立春の藍甕の泡立ち上がり

池田珪子

水 明

令和 8 年
5 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

粹 な 雨 (作品)

冬 季 五 輪 (近詠)

青 山 河 (近詠)

百 尺 竿 頭 〓 主宰作品の鑑賞

ゆ ず り 葉 〓 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

俳誌望見

発 表

令和八年 水明賞

令和八年 季音賞

令和八年 かな女賞

令和八年 新珠賞

山本鬼之介

石井喜恵

五明 昇

五明 昇

檜鼻ことは

石井喜恵 井上燈女
石山かつ子 ほか

大場順子 丸山マスマ
曲淵徹雄 ほか

池田珪子 渋谷さいち
染谷風子 ほか

網野月を

加那屋こあ

梅澤輝翠



六 賞

令和八年 鼓笛賞・山紫賞
審査経過
新季音同人発表

句集喝采

菅原卓郎

水明集

皆川更穂
倉田星歩

反町 修
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

水琴窟 (三月号鑑賞)

池田雅夫

山紫集

網野月を

山紫集作品評

青木鶴城

熊谷春の吟行会の記

檜鼻ことは

水明発展基金御礼

森本早苗

若狭水明(春の特別句会)

68

関西例会の記(大阪)

71

例会報・各地句会報

76

風声

77

令和八年水明全国大会のお知らせ

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

粹な雨

山本鬼之介

築山に登るも日課草青む

五寸ほど開けて見送る春障子

芽柳や怪談噺まだ早し

春雨ぼつり祇園甲部に差し掛かり
盛り塩に惹かれ暖簾を春の宵
軍記読みすぎ臙の庭に武者の影
麗かや日に一便の飛行場
青春回帰春の小川を徒渡り

冬季五輪

石井喜恵

未 完 成 て ふ 完 成 氷 面 の 舞 ひ
髪 解 く 少 女 の 笑 顔 雪 燦 と
黒 雲 や 競 技 中 断 雪 霏 霏 と
カ ー リ ン グ 胸 に ず し り と 石 冴 ゆ る
祝 勝 の ゲ ラ ス に こ と り 氷 溶 け
フ イ ナ ー レ 綺 羅 と 待 春 の ベ ロ ー ナ
己 が 身 の 軸 正 中 に 春 に 佇 つ

心待ちにしていたミラノコレティ
ナ冬季五輪が2月27日に閉幕した。
競技は日本時間の深夜から早朝にか
けて行われる為、ビデオに撮って翌
日観戦すると云う日々であった。
雪や氷の上での競技がこんなにも
多種ある事を今回はじめて知った。
期待のフィギュアスケートは素晴
しい成績と、数々の話題を呼んだ。
何と云っても神技としか思えない
ペアスケートは凄いと云う言葉
しか云えません。
私は以前からカーリングが大好き
で、石の行方を追う真摯な目差しに
魅力を感じます。今回、日本女子チ
ームは八位に終わりましたがこれも
亦良しです。
そしてこの五輪快挙の陰には、一
分の才能と九分の努力と云われてい
ます。今、襟を正す思いでいます。

青山河

五明昇

青嵐血潮滾らす木曾の駒
足湯して遠郭公の奥信濃
翡翠の瑠璃が引き裂く天竜峡
夏薊鬼女伝説の遺る郷
五千尺神居の里の夏館
縞枯れてゐて万緑の八ヶ岳
星降りて六根浄き夏の山

わが故郷の長野県では「長野県人」ではなく、「信州人」という表現が一般的だ。国立の信州大学は四ヶ所に分散しているが、本部は松本にあって長野大学とは呼称していない。幾つかの山脈が県内を分断、江戸時代には十二の藩領と数多くの天領・旗本領に分割されていたこともあって、地域ごとに生活や文化も様々である。県内には北信・東信・中信・南信の地方名が現存し、「信州合衆国」という表現がびつたり。一方で「清く、貧しく、（？）、美しく」という共通した県民性を持ち、県民歌「信濃の国」が国歌「君が代」に優先するお国柄でもある。アルプス一万尺を借景に、イワナや野沢菜を肴に銘酒「真澄」を酌む……ご一緒に信州を満喫する旅に出かけてみませんか。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

二月号

おでん鍋こそ吾が城ぞ大女将

鯉節と昆布でとった出汁に味を付け、種と呼ばれる様々な具材を入れて煮込む「おでん」は室町時代から続く日本料理の定番である。「おでん屋」と称される一杯飲み屋の他、居酒屋や小料理屋でも酒の肴として親しまれている。おでん鍋を守るのは経験豊かな大女将の役どころ。伝来の味に世相や人情を加えた独特の味わいは酔客の心を掴んで離さない。

想へば愉し冬満月に月の姫

冬の満月は、澄んだ空気の中で白く高く輝き、「コールドムーン（十二月）」や「スノームーン（二月）」と呼ばれ、高緯度で明るく光る冬の屋々との共演が楽しめる。この満月に日本最古の物語の『竹取物語』を重ね、「月の姫」であるかぐや姫に想いを巡らせた一句である。悠久の宇宙と変わらぬ日本人の心情を見据えた壮大な浪漫に感動する。

白魚や錫の銚ちろりが売りの店

白魚は、汽水域に生息する細長い透明な小魚で、春が旬である。新鮮なものは刺身、天ぷら、卵とじ、お吸物などで食

べられる。銚ちろりは燗酒や冷酒を作る際に使用する、取っ手と注ぎ口が付いた金属製（または耐熱ガラス製）の筒型の酒器。錫製は味に膨らみが出てよりふくよかな味わいになるとされ、小寒い春先の燗酒には打って付けだ。

寧日や春禽を追ふ連写音

春禽は、繁殖期を迎え活発に動き回る春の鳥の総称。燕、雀、四十雀、鶯、雲雀、メジロ、雉などが含まれ、鳴き声や姿で春の到来を感じさせる。温かい陽気の中、野山でさえずる鳥たちを狙って写真家や愛好家、愛鳥家のカメラの放列を作る。動く被写体を連続して撮影する連写のシャッター音が快く響く、やすらかな景色が目に見えるようだ。

沖も春御食つ国なる若狭かな

若狭国は志摩国、淡路国と並ぶ御食つ国（みけつくに）で、古代から平安時代まで、朝廷に海産物を中心とした御食料を貢いでいた。『延喜式』には雑魚、雑鮮味物、生鮭、ワカメ、モズク、ワサビなどを御贄（みにえ）として納めていたことが記されている。若狭はリアス式海岸や対馬海流の影響で今も海産物に恵まれ、訪れる人の味覚を堪能させている。

飴切りは披講のリズム初大師

飴切りは、川崎大師の仲見世などで見られる、棒状の飴を包丁でリズムミカルに切り分ける実演販売（とんとこ飴）である。古くから続く「厄除け（厄を切る）」の縁起物として人氣があり、夫婦や職人が息の合った音を響かせる。俳句の披講も読み手、名乗り、点盛が息を合わせ、飴切りのリズムのようにテンポよく進めたいもの。作品を全員で共有し、文字だけでなく声として味わうことで句会の最大の見せ場となる。

心根よ津軽訛の雪女

雪女は、雪の振る夜に白い着物姿で現れる、日本の雪国に伝わる美しい女の妖怪。息で人間を凍らせる、迷子に赤子を預ける、人間の男と結婚して子供をもうけるなど、怪異的かつ美しい伝承が多く、小泉八雲の『怪談』でも有名である。その雪女が「ど（どこへ行くの）」「ゆさ（お風呂へ）」「け（食べて）」「め（おいしい）」の津軽弁を喋るとは……。純真な津軽娘の心情に惹きこまれそうな一句だ。

風花が連れてきたるか機の音

風花とは、晴れた日に風に乗って舞うようにちらちらと降

る雪のことで、主に日本海側から太平洋側へと運ばれてくる。関東・甲信越には小千谷縮、結城紬、桐生織、伊勢崎絰、秩父銘仙など織物産地が目白押しだが、風花が運んできたのはどこの機音だろうか。規則正しいリズムが特徴の「ガッタン、コン」や「トントン」いう心地よい機織りの音は、古くから日本の農村の夕暮れ時に聞かれた「音の原風景」であった。

道産子の人馬一つになる雪野

道産子（どさんこ）は元来、北海道産の日本在来馬（北海道和種）を指す言葉であった。明治時代の北海道開拓において、道産子は荷物運搬や旅人の足として欠かせないパートナーであり、人間と馬が力を合わせて困難な土地を切り拓いた姿が「人馬一体」と表現される。道内には現在でも、ホーストレッキングや伝統行事の流鏝馬、道産子とは異なるが重種馬が走る「ばんえい競馬」などに人馬一体が息づいている。

進水の漁船見送る野水仙

新しく造船された漁船を初めて海に浮かべる進水式は、船の誕生を祝う非常に重要な節目である。一方で寒さ厳しい冬に凜として咲く野水仙は、縁起の良い花として正月の床の間などに飾られる。越前海岸には、海に身を投げた娘の化身として水仙が流れ着いたという伝説もあり、地元では海と人との絆を表す重要な花とされている。越前漁港に進水する漁船を六〇ヘクタールの水仙の群落が見送る見事な景だ。

ゆずり葉

◆季音二月

檜 鼻 ことは

介護終ふと笑みて泣く友冬ぬくし

松井由紀子

「介護終ふと笑みて泣く友」の措辞に、深く胸を打たれました。言いようのない安堵と喪失感、介護を経験した者にしかわからない複雑な心情が切々と詠まれ、長い看病の日々、身体的・精神的な疲れ、そして別れの深い悲しみが静かに伝わってきます。

長い介護の日々を終えた友の言葉や表情に触れた作者の友への眼差しが温かで、「冬ぬくし」の季語が厳しい現実を経たあとに訪れる複雑な心のありようを伝えていきます。

介護という重く厳しい現実を、声高に語ることなく、友の一瞬の表情を通して語られた一句。人の心の温もりをしみじみと感じます。読む人は、人それぞれの経験を重ねて、この句に接しられることでしょう。

鍵かけぬ里の軒先大根干す

大塚茂子

ここ数年、耳を疑うような殺人事件や強盗事件のニュースが頻繁に報じられるようになりました。留守でも鍵を掛けない家がほとんどで、のんびりした田舎暮らしをしていた子どもたちが嘘の様。いつの間にか物騒な世の中になってしまったものです。

掲句は、素朴な農村の暮らしと人の信頼関係を、温かく描き出した一句です。「鍵かけぬ里」の措辞が、戸締まりをする必要のないほど、人と人との信頼が保たれている小さな共同体の姿を描き、人情の厚さと里の気風に安らぎを覚えている作者の姿が想像できます。

干し大根の白さとともに、里に生活する人々の素朴で穏やかな暮らしがしみじみと伝わってくる一句です。

顔触れの変はらぬが良し初句会

松山清子

俳句を通して、句友との交流が新たに始まる初句会。俳句

を嗜む者にとって楽しみな新年の行事です。

長く続いている句会では、同じ仲間がまた元気に集まることと体がめでたく、「顔ぶれの変はらぬが良し」という措辞には、しみじみとした作者の思いが込められています。毎年同じ仲間が集まり、同じように句を持ち寄り、互いに批評し合う。その継続こそが何よりの喜びであるという作者の思いが伝わってきます。「変はらぬ顔ぶれ」は、長い年月を共に俳句を楽しんできた仲間です。歳月の中でそれぞれの句友の人生の変化がありながらも、こうしてまた同じ場に集えることは、決して当たり前ではないという感慨も感じられます。

俳句という共通の楽しみを通して続く人々の縁の深さが味わえる一句です。

志士たちの馳せし道なり藪柑子

横山 君夫

東山安井のバス停で下車し、高台寺南大門通りを直進、急な坂道を上っていくと、やがて「維新の道」と書かれた石碑が見え、京都霊山護国神社に至ります。史蹟「旧霊山官修墳墓」には、明治維新の時代に生きた志士たちの御霊が祀られています。

幕末の京は暗殺の時代。池田屋事件、寺田屋事件の他、悲運の志士はおびただしい数にのぼります。その戦乱の京にあって、桂小五郎と幾松、坂本龍馬とお龍のように、志士たち

と花街の女性たちとの間で恋が生まれた時代でもありました。「志士たちの馳せし道なり」の措辞は凜とした響きをもち、激動の時代の熱気や緊張を静かに描きます。そうした歴史の気配と藪柑子の取り合わせが実に見事で、この対比が、句に深い奥行をもたらしめています。藪柑子の実の鮮やかな赤色が、過ぎ去った時代と現在とをやさしく結びつけているように感じられ、趣のある一句です。

水仙の咲きて母の忌近づきぬ

越田 栄子

古来中国では水辺に生息する植物を清らかなものとし「水仙の仙人」と呼んでいたと言われています。水仙は凜として慎ましく、その白い花とほのかな香りはどこか人の記憶を呼び起こすような気配を持っています。

毎年の冬、同じ頃に咲く水仙は、季節の移ろいを知らせると同時に、過去の記憶をも呼び覚ます花であるのかもしれない。そのような水仙の花に、作者は母の命日がそろそろであることを自然と思い出されたのでしよう。

「母の忌近づきぬ」の措辞は、淡々とした言い方でありながら母への深い思いが含まれ、水仙の花とともに母の記憶が蘇るという作者の静かな感慨が伝わってきます。水仙の清楚な姿は、母の人柄や面影と重なっていたのかもしれない。亡き母への思いがしみじみと伝わってきます。

季音雪

スローカーブ 石井喜恵

立春や蛇腹のやうに猫のびて
決め球はスローカーブや草青む
草青む土手に投げ出す膝小僧
急流のしぶきに木木の芽吹きかな
下萌や墓石に銘の彫り深き

初燕 井上燈女

弧の伸びを空に描きし初燕
電線に燕の即興賑やかに
捨てし句を拾ひ直してすみれ草
芝萌や深き轍を残し去る
芝萌ゆる反転決むる子のサツカー

薄紅梅 石山かつ子

春浅し船玉奉る氷川丸
声のよき尼僧の経や薄紅梅
薄紅梅ほめて暇を言ひ出せず
川原に水ほとばしる露の臺
春の虹湯浴みの稚やを手渡しに

香雲丘 大橋 廼代

王将戦の旗に纏るる桜東風
水軍の灘茫茫と丘の梅
藁たてがみの親子駄けだす梅の丘
残生やひかりの土筆ぼきと摘む
将軍塚の土筆はなべて臍曲り

春の宵 大村 節代

春浅し木の階段のきしむ音
句作りに十指用ゐる春の宵
目配せの視線を外す春炬燵
丹田に力を込むる寒戻り
白椿屋号をしかと確かむる

浅春 菊池 ひろこ

刀自いつもうしろ姿や梅の花
浅春の街まぼろしの靴磨き
下萌や野外演劇暮れなづむ
下萌のスロープ遠く電車音
異人らに千木はV型春うらら

春の足音 五明 昇

まんさくに始まる陸奥の花暦
木曾馬の高き嘶き草青む
爪皮も軍靴も遠し春の泥
春灯に抗ひ難き縄のれん
青饅や愛敬あばたの若女将

間一髪の境 延昭

故郷の春 鈴木康世

春泥に間一髪のブレーキ痕
若布刈舟艫で舵取る漁師妻
梅東風やお国訛の陶器市
船の名の並べて丸の字風光る
栄螺を生で馴染の店の角の席

土にまだまどろみのあり春の土手
水草生ふ隠沼にたつさざれなみ細波
稜線の静かな動き木木芽吹く
松の花松千本に咲くは良し
反射炉の白き煉瓦や風光る

春の訪れ 島津初花

鶯色 十倉和子

送水文途切れ途切れし宵の雨
幾うねり炎呑み込むお香水
若狭井へ願ふ太夫の声乱る
送水会见届けと言ふ奈良の女
送水会クライマックス舞ふ火の粉

少しづつ少しづつ春赤子立つ
退院は鶯色の春セーター
三月の水かげろふに塔ゆらぐ
船笛の訝ただよふ梅林
すつくと雉われに向きをり立ちすくむ

桜 鳥羽和風

春 灯 星野和葉

春の土打たれて光鋏の鏽
細波は音を残して桜貝
桜貝海の音する小引出し
鐘楼の余韻にほると初桜
飛花落花反り身麗し寺の屋根

甲高き子らの声ごゑ薄氷
下萌やどこか和らぐ仁王の眼
紅椿 女庭師の 鋭き 眼
カール美し西洋人形春の燭
盛り塩に柔らかき影春灯

余 寒 永野史代

歩 幅 町野広子

枕辺に運ぶ余寒の洗面器
つくばひや余寒の水を震はせて
源氏の君のあらはれさうな春灯
春ともし港に古き喫茶室
門限はとうに過ぎたり春灯

席譲らるる微妙な心地余寒かな
湯の滾る音の他なし余寒かな
券売機 喋る余寒の 無人 駅
木の芽吹く博物館にある余白
木の芽風つくづく狭くなる歩幅

ミモザ館 松井 由紀子

玉 垣 森川 義子

子を呼べば鳥が応ふる春の朝
春寒し不器用に切る千六本
しばらくはミモザ館になる空き屋
春場所や訳知り顔に独りごつ
永訣の日にも聴きたし卒業歌

玉垣に夕日の美景探梅行
すぐそこに初鳥見ゆる探梅行
山の子の筈と遊ぶ冬夕焼け
冴返る誰も帰らぬ門灯す
蒼天を独り占めする半仙戯

プラチナ色 茂木 和子

享 保 雛 森本 早苗

緋の椿秋子を偲ぶ句碑の文字
潦金魚椿の緋のゆるる
噴く彩はやさしき色や木の芽雨
万歳は喚起の形木の芽吹く
音消してプラチナ色の木の芽雨

有馬湯の街口ビーに凜と享保雛
五人囃子も心待ちなるお遊戯会
飯蛸をこんもりと盛る丹波焼
鱒東風明石に銘菓鯛最中
思ふ日やかの人愛でし梅固し

江戸の春 山中 みどり

花辛夷一せいに咲き江戸の春
マラソンのランナーむかふる花辛夷
散り敷ける辛夷踏みゆく暮の春
人送り振る指先に春の冷え
花散りてしかと天指す辛夷の芽

凜 網野 月を

花色に花は咲きけり凜と咲き
白は貴女赤はわたしよチューリップ
春光や心を映す風の色
青き星春の一日に赤く黒く
黄蝶は黄と白蝶は白と戯れる

第26回「俳句四季」全国俳句大会
予選通過作品発表

最近の名句集を探る

大西朋

伊藤伊那男『狐福』
金山桜子『ひかりあふうを』
秘矢まりえ『妖精に注意』

司会 筑紫磐井
内村恭子
山田耕司

*今月の華

谷口摩耶／福島たけし

*好評連載
吉川千早

*巻頭三句

山口昭男／村上喜代子

俳壇ランドスケープ
青木亮人

西川火尖／宮谷昌代

句の手触り、俳人の響き
大西朋

鈴木五鈴／花房八重子

俳句へのまなざし
橋本喜夫

*俳句と短歌の10作競詠

細村星一郎＋工藤吹

俳句のレトリック
藤村公洋

*DIALOG

長谷川かな女

神作研一

水明・網野月を

てのひらの江戸
――古典籍を旅する
堀田書何

*今月のハイライト

「松籟」「梅檀」

諸家書架
石井隆司

「円座」「ひろそ火」

たもとほる
俳句よもやま話

イラストレーター・

二ノ宮一雄

伊野孝行氏の新連載

一望百里



Haiku Shiki

2026年5月号

4月20日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

青 饅 大場 順子

春暁や置き忘れられ太白星
 春暁や形なしてきて仁王鳥
 読み耽る「若紫」や春ともし
 いにしへの恋や蒲生野つくづくし
 青饅やあくまで青き最上川

雪 解 光 丸山 マスミ

涅槃西風眺きりり多聞天
 依代の杉の古木に雪解光
 木の芽張る声明の声朗朗と
 人待つも豊かな時間春灯
 奈良墨の香る写経や入彼岸

狼の声 曲淵 徹雄

鉄塔の影のさゆるぐ冬の川
 鳴き声を知らぬ狼犬日脚伸ぶ
 春疾風重機の叫ぶ最終章
 村を恋ひ五木の山を焼く媼
 勇みたつ駒の雪形春祭

遠 会 積 梅澤 佐江

境内の白梅越しに遠会積
 差しくるる春雨傘や河原町
 湿原の漣まぶし蘆の角
 丸窓に雪の別れや御用邸
 春の星潤む前触れなき訃報

春は卒業 河野 はるみ

「奥の細道」出立の地に蛸蚪群るる
 蛸蚪の足すは大川へ勇み立つ
 駅広場産地をちこち春野菜
 薄雲に垣間む神話春の星
 戒名に俳号入り春の星

長春花 池田雅夫

春暁や水平線の向う側
春風や母のほひの割烹着
肉体を抜くる魂おぼろ月
春灯や老ハスラーの熱視線
永遠の乙女ごころや長春花

肴いろいろ 正木萬蝶

寒中の膝いかにせむ女学生
たまゆらの朝のしろがね猫柳
ふるさとは御食つ国なり青饅食む
流水の軋む夜はるかより訃報
内内の話とけ出す春の闇

針供養 内田恵子

丁寧に絵筆を洗ふ針供養
立春やプリズムとなるガラスピル
草青む境界線のあいまいに
冴返る色の濃くなる水平線
この円盤は正体不明たんぽぽ野

巾の糸 原田秀子

花魁の簪に似て金縷梅
山襷の紫立ちて寒の明け
寒明や高音も床し巾の糸
口遊む夜明けのスキヤット春の星
秘密基地四つ葉のクロバー群れてさき

雛飾る 石川理恵

雛飾る役目を子らに引き継ぎぬ
陰膳や豆皿に青饅少し
春暁の君が代を厨に聞きぬ
北口の余寒は南口へ抜け
余寒なほ寂しさのなほ七七日

津浪石 近藤徹平

金縷梅や入江見下ろす津浪石
紅梅や一家の祈願きそふ絵馬
寒明や書斎を覗き込む鴉
菜の花や夕陽に染まる園児帽
原発が津浪に瓦解三月の忌

雪の果 松宮保人

茶柱の立つ旅立ちや春立ちぬ
音外す妻の鼻唄春一番
髪切つて床屋出づれば春一番
突風や怒り狂ひし杉花粉
別れより次の出合ひや雪の果

彼岸此岸 日高道を

彼の地ではミサイル発射彼岸西風
停戦を今か今かと春の雪
啓蟄や戦好きなる漢ども
紛争は麻疹かいづれ収束す
日の本の平和な暮し山笑ふ

金縷梅 大塚茂子

里山に自製のきかぬ金縷梅
甘き香の数多の赤芽沈丁花
坂多き温泉街の梅の園
クローバの咲き誇る田に大の字に
春の星水ゆさゆさと和紙生る

蠶 青木鶴城

下萌や獅子心中の虫までも
山焼の煙のご加護常香炉
飛梅や盛者必衰会者定離
猫柳時まつたりと舟の櫂
郎子いらつこを誰たれぞ呼ぶらむ月おほる

蟹 座 福田千春

春の星夫の蟹座がみつからぬ
春の闇貝は口開け毒を吐く
柿釉の器重たき余寒かな
枕辺に地球のうなり流水来
流水来むかし駅舎のオムライス

雨 水 檜鼻ことは

話すより聞くことが好き冬木の芽
独り居の灯りつければシクラメン
間延びする猫の鳴き声春立ちぬ
歎持てば青空見ゆる雨水かな
春暁や出船見送る海の村

道化師 荒井 俱子

道化師の作り笑ひや春寒し
花壇守る小人七体クロッカス
一畝に早春の土匂ひ立つ
早春の空に切り込むフリスビー
若布干す海神祀る漁師町

勝山左義長まつり 原田 自然

左義長に子どもも浮き浮き浮ぎばやし
左義長やおどけ仕草の浮き太鼓
しなやかに桴も身のうち左義長
左義長ややぐら周りの絵あんどん
どんど焼き火柱のぼりて神送る

犬の耳 野口 和子

長屋門越しに溢るる梅真白
四方の山黄にかすみけり杉の花
春の宵籠ゆるびたる寿司の桶
春の昼遠くなりゆく犬の耳
坂登りどん詰まりにはミモザかな

スニーカー 松山 清子

啓蟄や子のあざやかなスニーカー
桜の芽確かめんとて川縁へ
葱坊主ここは葛飾河川敷
あの空き屋沈丁花咲き人誘ふ
菜の花や豪華客船沖を過ぐ

目覚め 飛永 鼓

繕ふを楽しむ日なり春の雪
春めくや追ひかけてくる水の音
春一番にくれてやりましよ怠け癖
首竦め陽を貪るや春の土
春の土光りを孕み目覚めけり

梅日和 西浦 千枝子

さり気なくおしやれして行く梅日和
無人店のレジは空き缶春蜜柑
手をあげて渡る踏切一年生
ずるずると延ばす門限春休み
ドライブの玻璃を鏡に梅の花

雨の一日 田中章嘉

貯水ダム雨の一日を待つ桜
年毎に季節早まり梅の花
襟巻を捲かで持ち行く温しかな
久方の雨の恵や春浅し
春眠の朝の目覚めの辛きこと

大和心 熊倉千重子

薄水溶けて蒼空揺るる午後
子が一人踏めばも一人薄氷
梅の花大和心を呼び戻す
八十路にて迷ひの千重子月朧
下萌や乳歯むずむず気に掛かる

槽の音 松島寛久

槽の音の聞こゆる漁翁の春炬燵
ワニの背を飛んで兎の背を剥がれ
餅ついてロケット迎ふる兎かな
うさぎ毘友と仕掛けし里の山
夫婦墓数珠もむ音も雪の果

俳句

5月号 予告

4月24日発売

巻頭作品50句 池田澄子
作品21句 今瀬剛一・藤本美和子

「はたらく」を詠む

集 〔総論〕「働き方改革」と俳句……神野紗希
〔鑑賞〕仕事の名句30選……村上頼彦

特 「エッセイ」山内蘭彦・福永法弘・押野裕・星野愛・
黒澤麻生子・矢野玲奈・抜井諒一

大 〔北大路翼〕給食のをばさん
シヨートインタビュー……北大路翼

一句鑑賞……高野ムツオ・鳥居真里子・小林貴子・小川軽舟

句集特集 森岡正作句集『鮎の川』

はみ出せ！俳句……夏井いつき

小林秀雄の眼と俳句……青木亮人

飯田龍太の世界……廣瀬悦哉

季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

加賀 池田瑠子

輻輳挽く卒寿の翁のちやんちやんこ
 友禪を晒す水音雪催
 面打ちの一子相伝冬の雷
 紙を漉く女の古りしゴムの靴
 竹を裂く匠の息の白さかな

ものの芽 渋谷きいち

ものの芽のものは言はねど物語る
 啓蟄や墓穴掘りたる虫もあり
 春帽子置かれしままに幕が開く
 春コート脱がす浜辺の貝探し
 肩よせる夜の銀ブラ春コート

必勝だるま 渋谷風子

寒明くや返せぬままの女傘
 急告ぐる狼煙の如し遠山火
 幻聴の「予科練の歌」桜魚
 墨痕の薫る玉章春時雨
 目を入るる必勝だるま竜天に

異国の人 石田慶子

春シヨール書物の上にふはり置き
 下萌を踏まないやうに猫車
 猫柳牛乳瓶に五本程
 朧夜の異国の人と相席に
 少しだけ遠回りして春の星

花トシネル 梅澤輝翠

薄氷を舐むるのら猫瞬きす
 実習生の白衣ひきたて朝桜
 実力を出し合格の花トシネル
 寒明や岩にぶつかかる海の音
 露の臺油の中で華開く

雨後春筍 菅原卓郎

春霖の城に家紋の丸瓦
荒磯にこなす長竿めかり舟
染め斑の残る山巒春出水
原付に法衣なびかせ入り彼岸
大川を分かたつ水閘水温む

三姉妹 新曆文

駅で弾くピアノに光る春の塵
卒業や首席の彼の丸メガネ
ものの芽や雨に蠢く時刻表
啓蟄や建売三棟旗立てて
お彼岸や苗字異なる三姉妹

寒明け 越田栄子

和紙の里影絵となりぬ寒茜
山里の一番鶏や寒明くる
焙烙に豆のはじけて寒明くる
苜蓿牧場の馬のよく跳ねて
まんさくや屋根に寝転ぶ猫のゐて

薄紅梅 清水桂子

独り身に煩惱少し雪時雨
雨曇り薄紅梅の華やぐる
作業着のロゴの大書や冴返る
白梅のふふむを確と梅見かな
冷たき手つなぎ梅見の老二人

語部の訛 保坂翔太

ランプの火揺るる秘湯や雪深し
語部の訛をかこみ楳明かり
腑に落ちぬ公転自転冬の夜
軽便の廃線歩く熊二頭
専願の絵馬の太字や春隣

寒明 横山君夫

雲払ふ建国の日の日章旗
洋行へ銅鑼の音一打寒明くる
ほぐれ初む水の硬さや寒の明
野の川は光の帯や猫柳
強東風や絵馬が絵馬打つ天満宮

まんさく

笹本啓子

クロッカスパステル色となる花壇
観梅や馥郁といふ佳き言葉
若芽啄む鳥を横目に梅見坂
まんさくや村ゆつたりと動き出す
声高に話す農夫や水温む

花ミモザ

下川光子

待ち合はす午後のひととき花ミモザ
参道の此処はれやかに河津桜
一步一步踏んでは溶けて春の雪
草青むハイヒール等脱ぎ捨てて
建売の迫る菩提寺彼岸かな

鈍色の幹

宮崎チアキ

雨催それも嬉しと梅の花
紅梅のちらと見えれど屋敷内
水温み揺蕩ふ波の薄緑
春の雨鈍色の幹顕なり
蒲公英の輝く野道何処まで

春寒し

山戸美子

春寒し墨絵のままの山であり
春寒しバス出発に我ひとり
春寒し易者の曆楽勝と
春寒し予約の患者外にまで
結局は元の投げ入れスイートピー

大茶会

野村美子

紅梅や恩師を祝ふ大茶会
紅梅の盛り華やか六義園
石垣の丸亀城や春夕焼
春めくや明るさ増して街の色
八十過ぎの初めてのヨガ長閑なり

春の目覚め

山岸久美子

山や川春の目覚めの音きこゆ
岩山に春到来や苔の色
吹きまくる春北風に樹樹叫びをり
春暁の空に金星躍り込む
弧を描き春暁街を抱擁す

春めく 西幅公子

山眠る岩盤削る音抱へ
春めくや宙に跳ね飛ぶ沼の鯉
伸びやかに摘み菜する影春めけり
焼き斑にぞくぞく息吹く物芽かな
子豚多多乳房競り合ふ春の小屋

雪割草 鈴木玲子

打ち橋の先にゆかしき猫柳
銀盤に映ゆる少女よ猫柳
確かこのあたり雪割草ひそと
じつと眼を据ゑし肖像余寒かな
城壁に残る銃痕余寒かな

花 葛城千世子

わが狭庭名もなき花に春の雪
花器用の白石捜す木の芽時
花の店どの色にせむ遊蝶花
生け込み中ふくらんでくる桃の花
花抱ふ稽古帰りの春の雨

花の庭 佐々木史女

走り根に二輪咲かせし臥竜梅
来し方に誇るものなし額の花
春風や那須野ヶ原の牛の群れ
留守電に亡き友のこゑ月見草
晩年の過ぐる早さや竜の玉

水温む 森和子

金縷梅や秩父連山青く見ゆ
まんさくの古き蕎麦屋のお品書き
水温む大きくなりぬ鳥の声
動いたと覗く川底水温む
水温む鯉の背鱗の軽やかに

亀は鳴くのか 寺内洋子

ベビーカー覗けば犬の仔春うらら
亀鳴くを待つや池の端句帳手に
夫の忌やたまには彼岸参りなど
春日傘持ちちて漢の闊歩かな
「半平太」気取る漢や春の雨

春の雪 高橋 満耶子

掌中のインコ看取るや春の雪
雛鳥はポツケ大好き浅き春
鳥籠はそろそろ同居夜半の春
親指にネイルの夫や風光る
朝バテは運動不足地虫出づ

大空 綿貫 ひさの

星辰のめぐり行く音冴返る
今はもう旅の連れなき春の空
春の空あるのでしようか浄土にも
幹の肌ひび割れて咲く庭の梅
レガッタや応援の声大空へ

狭庭の梅見 野平 美紗子

春北風や高校生のある時も
わが狭庭万両の実の赤々と
庭先の小岩の陰にももの芽が
朝の庭白梅もあり紅梅も
狭庭なれども今朝の梅見を楽しめり

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2026年 5月号

発表! 第18回文学の森賞 第27回山本健吉評論賞

●受賞の言葉、受賞作品、選評など

レポート 若林哲哉 句集『漱口』読書会
バナリスト・田島健一 千野千佳 大熊光汰
司会・松本てふこ

座談会 ※イベントより転載
「俳人・八田木枯を語る」
鳥居真里子 藺草慶子 西村麒麟

シリーズ 推薦! 注目・期待する俳人⑥
水口圭子 するきいつこ 森岡秀美
紅葉栄子 猿橋嘉鶴 六車佳奈

【注目の句集】 朝長美智子『更紗』

連載 宮坂静生 青木亮人 林誠司
石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄
坂口昌弘 八田九郎

投稿欄 添削 堀本裕樹
兼題 高橋将夫
雑詠 稲畑廣太郎 今瀬剛一 加古宗也
古賀雪江 鈴木しげを 対馬康子
西池冬扇 能村研三

※一部変更の可能性があります。

株式会社文学の森 お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

現代俳句鑑賞

網野月を

マラカスの渡すにも鳴り片時雨

山田耕司

〔俳句界〕2月号・近作6句より〕

上五中七の「マラカスの渡すにも鳴り」は、将にその通りということなのである。が未だに誰として句にしたことの無い事柄である。つまりオリジナリティーの横溢した詩である。作者の作品の中にはそういう意味での詩作が多いと思われる。誰もが取り扱っている素材を新しい捉え方で表現したというのではない。オリジナリティーの發揮される手垢のつかない素材を見出す力量を具えた作家ということである。他に「束ぬるに葱立たされて立ち通す」がある。

声真似の悲しい屏風裏のひと

田島健一

〔俳句界〕2月号・近作6句より〕

声真似や声帯模写は芸能の一つとして表舞台で演じられることもあるのだが、「屏風裏」というのである。演者の顔も姿も表舞台には無いのである。中七の作者の断定「悲しい」はそこから発想されたのではないだろうか。かりに舞台の上の演者がいたとしても所詮は「真似」なのであり、作者の「悲しい」という捉え方は強ちひとりよがりなものではなく、

むしろ読者の共感を呼ぶものではないだろうか。他に「去り際の分からぬ鶴の待ちぼうけ」がある。

寒風やのつべらぼうの撫で仏

安達昌代

〔俳句界〕2月号・舟としてより〕

「寒風」のなかに佇む「撫で仏」である。中七の「のつべらぼう」はただ「撫で仏」の形態だけを描写しているのではなくて、今まで長い間、信心され「撫で」られ続けてきた「仏」であること、つまり「撫で仏」の本質に迫っているのだらうと鑑賞できる。他に「野遊の莫塵敷くさまよふ舟として」がある。

師と同じ誕生月や淡すみれ

藤田直子

〔俳句四季〕2月号・巻頭句より〕

子供の時から人は誕生日には敏感な感覚を持っているであろう。が、掲句の「誕生月」は、毎年のように亡師の年齢に近づいて行く我が身を思つてのことではないかと想像する。そこには亡父亡母の誕生日とはまた異なった意味合いが潜んでいると思われる。座五の季語「淡すみれ」の斡旋には涙してしまふ。他に「ゆく道のうすうす見えて雪解霽」がある。

「鬼平」になりきる吾や蜷汁 山本鬼之介

〔俳句四季〕 2月号・しじみ汁より

池波正太郎の世界「鬼平犯科帳」に描かれる長谷川平蔵の心持ちになりきって、「蜷汁」しているのである。「なりきる吾」を解説するのは野暮というものであろう。「馴馬の三蔵」にある名台詞「言葉にしたらせんないせんない」なのである。

茹で卵つるり立春の手触り 森須 蘭

〔俳句四季〕 2月号・祭演より

いわゆる中七の途中に切れがある句跨りの句作りである。この句跨りのリズム感が中七の「つるり」の措辞を強力にバックアップして演出している。中七座五の「立春の手触り」として、触感を固定した表現は「立春」の季語には珍しい表現であろう。

音符のやうな若者が行く秋の街 松井由紀子

極月や蕎麦屋の壁の由良之助
月白や海の風車が固唾のむ
数へ日の街冷えいそぐ石畳
露味噌や祖母母わたしそして子も
名月に面差しあらむかな女の忌

〔句集「葛の花」より〕

句集は二月に上梓された。扉絵をはじめ三章の扉に自作の

油彩でしようか、飾られていて瀟洒な作りになっている。作者はサロン・ドートンヌ会員であるから、然もありませんといったところでしょう。その数点の扉絵のフォービスムもしくはキュビスムというよりは寧ろアヴァンギャルドな描出の技法が、句集に載せた各々の句に能くマッチして補充関係にあるようである。

一句目は「音符のやうな」が表現の肝である。「若者」を修飾しているのだが、何とも新鮮な修飾語である。「音符」は視覚的なそれではなくて聴覚の本質を描出しているように筆者は考える。二句目は気の利いたアイディアの句である。「由良之助」は文字通り仮名手本忠臣蔵の主人公であり、また「蕎麦屋」は討ち入り前夜に四十七士が集ったところである。「極月」ならではの発想である。三句目の「海の風車」は一体何のことであろう。最近の風力発電の風車なのか、オランダなどの歴史的景観の風車なのか。とにかく地上の人工物が「月白」という自然の形態に「固唾」を飲んでるのであって、人為と自然という大きな構図の中に俳句表現を活かしているのである。

第四句目は、「冷えいそぐ石畳」に冬の深まりを描出している。第五句目は、中七座五の「祖母母わたしそして子も」の四代にわたつての家族のレジエンドを感じさせている。「露味噌」という微妙な味わいに四代の伝承の尊さを担保しているようだ。第六句目は、客体と主体の関係性を哲学的に捉えたものである。いや倫理的と言った方が好いかも知れない。この句の場合、「名月」は作者の心の鑑なのであるから。

『水明誌』を繙く（水明二月号）

加那屋こゑ（「鬘」軸「墨BOKU」所属）

福耳も引つ張られたる大マスク 柳父はる

新型コロナウイルス流行以後、さまざまなマスクが店頭に並ぶようになった。それまでは白が当たり前だったが、いまでは色や柄も豊富で、選ぶ楽しみすらある。サイズもふつう（約17センチ）を中心に、小さめ、やや小さめ、大きめと展開され、メーカーのきめ細やかな配慮がうかがえる。

掲句の「大マスク」とは、この「大きめ」のマスクを指すのだろう。たしかに顔の大きさは人それぞれで、大柄な男性など、標準サイズでは窮屈そうだ。頬に食い込むゴム紐が痛々しく、はち切れそうなマスク姿を見ることがある。そのゴム紐が掛かっているのが福耳だという。福耳とはどの程度のサイズを言うのだろう。ネットで調べたところ日本人の標準的な耳たぶの厚さは6ミリ程度、それ以上に分厚ければ福耳といえそうだ。福耳からは縁起の良い神を想像させ、包容力や人望の厚さも感じさせる。この吉相の持ち主は敏腕のビジネスマンかもしれない。肉付きのよい大きな顔でほとんどん仕事を取ってくるエネルギッシュな姿が浮かぶ。マスクは冬の季節であるが、福耳という言葉から新年らしさも思わせる。

日記買ふ未知の傘寿を遊ばむと 梅澤佐江

自分が中年になり親が高齢者になった今、人間の「老いのスピード」について考えることが増えてきた。人間がおぎゃあと生まれ、何歳頃に立ち、喋るようになるかなど、子供の成長ならおおよその見当がつく。しかし老いの速度はどうだろう。生活習慣や病、環境などさまざまな要因が絡み合い、誰もが同じ速さで老いることはない。緩やかな坂を下るのか、それとも急坂を転がるのか——進んでみなければ、その道筋は見えてこない。文字通り老いは未知の世界だ。

これから八十代を生きていく作者。その心境を揚句では「遊ばむと」と言い切る。老いを嘆くのではなく、むしろ引き受け、愉しもうとする姿勢がそこにある。覚悟というよりもどこか軽やかな心の余裕が感じられる。真新しい日記帳にその一日一日を書き重ねて、生きた証を刻んでいく。作者はこれまでの人生も十分に楽しんできた人に違いない。さらに人生を深め、謳歌していこうという思い。老いを未来として受けとめる、明るく軽快な一句である。老いと向き合う姿を示す佳句に出会えたことが嬉しい。

俳誌望見 梅澤輝翠

令和八年一月号 第十四卷第一号

代表者 雨宮きぬよ 橋本榮治

発行所 横浜市鶴見区

「柵」

平成二五年一月横浜で創刊 師系水原秋櫻子、殿村菟絲子
自然の生命を感じ、季節の移りゆく姿を言葉にとどめ、日々
の生活の中に詩心を育むを主張とす。月刊

代表作品 雨宮きぬよ「霜のこゑ」八句より四句

ひとり踏む落葉ひとりの音を立て

散紅葉まはして水の流れけり

結び目のなかなか解けず霜のこゑ

寒むや寒む風に重さの加はりぬ

一句目一人で歩む落葉の中ひとり踏む落葉の音は自分にだ
けしか聞こえない。ひとり分の音を立ててである。

二句目川に散った紅葉は真っ直ぐでなくくると回りなが
ら流れていく、よく見ている景です。まわして水の流れけ
りの措辞はさすがです。四句目、寒さが風に重さを乗せてき
ている。寒むや寒むの措辞がより現実を印象付けている。

代表作品 橋本榮治「日本海」八句より四句

北吹くや羽越本線一輛車

凧や木造校舎よく軋み
逆らへずあて吹き溜まる落葉かな
掻く雪に挿して休まずシャベルかな

羽越本線は新潟、山形、秋田を結ぶ幹線鉄道路線、新潟と
山形の県境にある笹川流れは名勝天然記念に指定され美しい
海の景観を誇っている。そこを一輛車が行く。海を見下ろす
様に木造の校舎が建っており、校舎と海は一体化して絵の様
である。海風の強い日特に凧が吹く日はよく軋んだ事では
う。

琉集I 二十八名七句より二名 橋本榮治推薦

熟柿食ふ暗き顎われにあり 石 巖 岳

愁思とはこの一本の秋の薔薇 津久井紀代

梓抄 二十六名七句より二名 雨宮きぬよ推薦

きりもなき羽音鳥声柿実る 小岩浩子

二段稲架組みて日暮となりにけり 遠藤真砂子

二〇二五年度年間賞発表

百燈賞 中島昌子 橋渡る二つ目あたり春の雨

柵賞 福田まり ミモザ咲くミモザサラダを朝の卓

琉賞 山崎満世 はなびらは夕日のうすさ冬桜

琉賞 篠原悠子 一望の枯野三等三角点

百燈抄 三十九名 柵集 三十一名と続き充実した俳誌を
堪能させて頂きました。ますますのご発展を祈念致します。

令和八年

水明賞

小 菅 岡
林 原 田
京 真 宣
子 理 子

令和八年

季音賞

保 横 笹
坂 山 本
翔 君 啓
太 夫 子

山本鬼之介

審査経過

◆水明賞◆

令和八年の水明賞は、令和八年三月九日の水明賞審査委員会において選考し決定した。審査委員会では、先ず委員六名から受賞に対する総論を述べ、次に令和七年水明集巻頭作家を候補者として各月の作品の出来映えや順位、更に、十二月号での水明競詠の順位も審査の対象として全委員が充分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記三氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「花」欄の作家として更に研鑽され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した作品を発表されることを期待する。

◆季音賞◆

令和八年の季音賞は、令和八年三月九日の季音賞審査委員会において選考し決定した。審査委員会では、先ず委員五名から受賞に対する総論を述べ、次に令和七年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者としてその作品について各委員が充分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記三氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より、季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけられると共に、後輩の指導にも心配りされることを望む。

令和八年

かな女賞

石井喜恵
鳥羽和風

令和八年

新珠賞

皆川更穂
宍戸洋子

山本鬼之介

審査経過

◆かな女賞◆

令和八年三月二十二日に主宰より、かな女賞を上記二氏に授賞したい旨を網野副主宰兼編集長に伝え、同意を得て決定した。授賞理由は左記の通り。

石井喜恵 長年総務部の仕事に貢献。常任運営幹事として水明の維持発展に寄与。雪欄作家として優秀な作品を発表し、会員に模範を示してきた。

鳥羽和風 若狭水明会の重鎮として、会員相互の親睦と俳句の向上発展に長年尽力された。雪欄作家として郷土色豊かな作品を発表し、水明を盛り上げてくれた。

◆新珠賞◆

令和八年三月二十二日、審査委員六名と各地区委員四名計十名による新珠賞審査委員会において決定した。

第一次審査 応募作品十八編について、各委員が五作品を選出し、それぞれに三点・二点・一点を配点。

第二次審査 第一次審査について審査委員六名が協議の結果、獲得点数の多い六作品「ユリイカ茶柱立つ・シングル・心の窓・根を下ろす・めぐる季節」が第二次審査を通過した。

第三次審査 右の六作品について、審査委員六名が作品の評価内容を披露して協議を重ね、最終的に投票で上記二氏の受賞が決定した。

令和八年

鼓
笛
賞

森
下
山
菜

令和八年

山
紫
賞

松
宮
保
人

大村節代

網野月を

◆鼓笛賞◆

令和八年の鼓笛賞は、令和八年三月二十二日の選考会を経て、森下山菜氏の作品に決定致しました。受賞者の作品は詩情があふれユーモアが加味された作品です。元田亮一氏の深く静寂な句の数々、秋谷風舎氏の独得な世界観に共感し、三者を比べ考えましたが、僅差で鼓笛賞は受賞者に決定致しました。

◆山紫賞◆

令和八年の山紫賞は、令和八年三月二十二日の選考会において、山本鬼之介主宰との協議ののち、ご合意を経て決定した。受賞者は、巻頭二回を含む特選四回に選抜され、充実した作品を発表されました。なお最終選考には他に青木鶴城氏、河野はるみ氏が残り健闘されました。

当該受賞者は、山紫賞への投句、また特選への選出は以後同様ですが、本年以降の山紫賞受賞選考対象とはなりません。

新季音同人(昇欄者)

○新季音「雪」欄

内田 恵子 梅澤 佐江

大場 順子 近藤 徹平

丸山 マスミ

○新季音「月」欄

保坂 翔太 横山 君夫

笹本 啓子 石田 慶子

葛城 千世子 下川 光子

○新季音「花」欄

小林 京子 菅原 真理

岡田 宣子 岡本 祥子

霜多 光代 南条 きわゑ

畑宮 栄子 森下 美智枝

湯浅 和

新 珠 賞 (結果報告)

○受賞作品

ユリイカ

—季の気付き—

皆川更穂

茶柱立つ

宍戸洋子

○応募作品 (選考会通し番号順)

玉子酒

鈴木藻好

美ら海の風

石黒田美子

シングル

吉川拓真

風 紋

秋谷風舎

地元よいとこ

反町 修

春光—嶺を仰ぐ—

前田夏野

色煌めく

三浦真由美

冬の音階

門真宏治

心の窓

椎名泰子

トラベル

田中弘子

根を下ろす

阿部幸代

春の調べ

榎本道代

四季の詩

香田裕誌

めぐる季節

中村留美子

景色探訪

平野 楽

銀 幕

森下山菜

句集喝采

菅原卓郎

◆吉井たくみ「未踏の天」

朔出版

著者略歴 1960年群馬県高崎市生まれ。2013年「阿蘇」入会石岡中正に師事。2018年「花鳥来」入会深見けん二に師事。「花鳥来」終刊後「初桜」に入会。2023年「櫻草」入会。同年「鷹のつらきびしく老いて」評伝・村上鬼城」刊、翌年第2回稲畑汀子賞奨励賞受賞。日本伝統俳句協会理事、俳句協会会員。

平成二十五年から令和六年までの作品を五部構成での第一句集。俳句は「万物共生」の文学であつて欲しいとの考えが作風に現れている。鋭い観点の写生句が多く見受けられる。

冬耕の大地に深く日を入れな
補陀落の海へと還る春の河
鬼灯の夕日に色を背負ひたる

第一句、春への準備の畑起しで、残滓の片付けから始まり固く締った土を耕してゆく。その土の深いところまで日の光を入れなくてはならないという発想は中々浮かんで来ない。第二句、南紀から奈良への旅行との前書が有り、熊野灘へ流れゆく熊野川の情景であろうか。悠久の地熊野へ河が春を引き連れて補陀落の那智にも待ち侘びた春が遣つて来る。

伊吹嶺の朝日もどる諸子舟
水空に揺るる月影植田澄む
夕空へ響並べて茄子の馬

第一句、琵琶湖の春の風物詩諸子漁の景。払暁に引き上げた刺し網を積んだ舟の向こうの伊吹山の朝日が差し込んでくる。伊吹嵐はもう来ないであろう。第四句、紙風船と言えは富山の葉売りの景品。子供は待ちに待った紙風船だが、米寿の母も昔を思い出すようにそれを突いている。母は幼少期の我が子を思い出して自身も感じているのである。

◆半田卓郎「直心」

文學の森

著者略歴 昭和八年茨城県生まれ。平成十七年「阿吽」入会、肥田整勝美主宰に師事。平成十八年「遠嶺」入会、小澤克己主宰に師事。平成二十三年「爽樹」創刊、句会統括役員。俳人協会埼玉県支部参与、所沢市俳句連盟特別選者。

二〇一七年より二〇二四年までの三八八句を掲載した第三句集。情景俳句に新しさと個性を命題に句作に励んでおられる。題名は仏教用語「直心是道場」(まっすぐな心で修業に打ち込む事)から引用したとの事。

虫干しの古書より出でし請求書
降臨の神のきざはし糸桜
幸せは日向の句鱗雲
白地着て竹筒の酒の結願寺

第一句、いつ頃の請求書であろうか。折り目も変色し開けば今はもう無い居酒屋の請求書かも。日付と金額に懐かしさを感じると共に自身の成長を自覚したのではないだろうか。第四句、札所巡りも愈々最終の寺での一駒。納経を済ませ今まで我慢していた小筒の酒をいだけ。疲労と達成感で般若湯もよく効く事であろう。朱印帳の墨の香が漂ってきそうだ。

逆さ富士崩して鴨の列衣む
子は知らぬ親の心や衣被
白樺のロシア夜汽車の霧の朝
心眼は写生の奥義寒牡丹

第二句、親芋は子芋に養分を与え続け子芋の美味しさは理解しているが子芋は親心を理解しているかは甚だ疑問の残る処である。子の成長を願う親の思いを衣被に託した一句。第三句、シベリア鉄道の駅での一場面でしょうか。機関車の蒸気が白樺林に立ち込める霧と相まって異国の地の払暁を見事に表現している。映画のシーンが思い浮かんでくる。

山本鬼之介 選

水明集

廢道に庚申塚の凍つる後夜
枯芝の隅に残れる三輪車
上つ瀬の時を奪ふや氷り滝
寒の滝峡の山氣を引き締めぬ
凜烈の富士山に涌く寒の水

さいたま 皆川更穂

階下よりめでたき調べ琴始
絵双六人生遅く上がりたし
初夢や不活化したる核兵器
野仏に夕日のあたる雪野かな
冬の朝野菜畑の薄化粧

反町 修

パンダ去る上野の杜に日脚伸ぶ
春立つや今年も同じ静かな日
春日射す普段届かぬ書齋まで
初午や祭る神社は女化社
春立つ日日向で描く孫の顔

利根 倉田星歩

初暦白地を埋むる夢プラン
人日の一件小事「こみ当番」
初雪の消え行く路地の空の青
口紅の折るる酷寒今朝の黙
和箏筒の袖吾を呼ぶ春待つ日

越谷 阿部幸代

鶴来たる俄に滾る沼畔
天をさし鶴の一声突き抜けり
寒鰯や波の泡舞ふ日本海
寒鰯の照りの見事さ厨沸く
主なき庭の水仙光よぶ

さいたま 寺町知子

道鏡の企み潰へ四方拝
絵馬にあるアラビア文字や初詣
洛北は人疎らなり水仙花
辿り着く文士の墓や水仙花
参道を尻に注連結ひ人力俵

田中弘子

青空に鱗薄氷にピンヒール

国境のトンネル抜けて雪解風

雪解や夫の躡少し伸び

けふ雨水あすで啄木百四十

春の猫瞳の中にオホーツク

下萌や狛犬の眼に惑ひ無し

霊峰の被く白衣や草萌ゆる

触れたれば心幼に猫柳

見上げては皆がほほゑむ燕の巢

淡雪や墓前に話すこと多し

初星や専用ジェット飛ばす人

極寒や散歩の狎が駄駄捏ぬる

冬の夜や息子の遺影にらむ吾

待合室の黙の長さよ春浅し

駅前絡線時計春さざす

雪道を絆深むる登校児

屋根叩く春の霰の徒ならぬ

雪掘の雪抱く野菜畑かな

雪解や躡糸解く一張羅

春蘭や生まれし袖を焦がれ咲く

さいたま 森下山菜

山陰の訛「だんだん」寒覘
水仙や四人目の親看取り終ふ
母のぼる天使のはしご春隣

真白なる車汚すや寒鴉

行き当たりばつたりの旅春隣

平塚 丸屋詠子

花餅に風遊びくる汁粉店
句を作る今が青春返り花

日々流転泣くな白鳥夜が明くる

雪ふはり皿にふはつとオムライス

猫二匹沈丁の香にまどろみぬ

さいたま 飯田忠男

泣き跡の残る笑顔や冬夕焼
白鳥の飛来に湖上犇めくや

初茜期待と不安の一人旅

団欒の時を潤すお降りよ

春立ちぬ声の限りの朝稽古

若狭 岡本祥子

遠浅間眺めながらの初句会
灰色の街を俯瞰の寒鴉

花びら餅太陽の朱を包みを取り

江ノ島に寄する静寂や冬茜

茜空機影真直ぐに春乗せて

さいたま 平野 楽

平野 楽

綿引まりこ

川島夕峰

菅原真理

弾初は「春の海」より音合はず
じよんがらをいきなり奏で弾始
糶声に肌をつや増す寒の鱗
炭熾し正客を待つ茶室かな
太筆を走らせ書家の吉書かな

さいたま 岡田宣子

寒鱗の正油を弾く勢かな
たどたどしバイエル楽し弾初
日脚伸ぶ針緩慢に時刻む
華やかに春着の異人浅草寺
初弾の和琴倭の竹林に

吉川 杉浦千祐

頂上の見えて道なし冬の山
畦道を黒き人影寒九の雨
遠を見る哲学者めく寒鴉
立春や指折り数をおぼゆる子
雲雀雲雀雲の上から何見える

小林京子

受験子の付箋だらけの参考書
春浅し酸味効きたるサンドイッチ
路の臺今は聞こえぬわらべ歌
湯治場に響くざわめき寒明けぬ
インスタのフォロワー千人春兆す

さいたま 元田亮一

寒茜機運待ちるる摩天楼
野焼かな戦国武将の影揺らぐ
思春期の恋燃やすごと野火猛る
薄氷や過疎の気泡を閉ぢこむる
裏山の雪中青き露の臺

霜多光代

喪主といふ終の妻の座冬の菊
毛羽立ちたるマフラー今も夫匂ふ
健啖の夫在らばこそ鍋料理
凍蝶や遣さるる身を諾へば
夫愛でし臘梅の香の七七忌

本橋稀香

どんと焼き力の世界失くさむと
擬宝珠に集まる光初日の出
七草粥己のあゆみゆるりと
山茶花やほほ紅く染め通学路
寒風や投手と捕手の息びたり

東京 畑宮栄子

少年のフルスイングや春の泥
立春や会ひたき人へあひにゆく
春の夜や残すか迷ふ留守電話
肩の荷の僅かに下りて春の月
靴箱の揃目番号春の宵

石関六弦

老いたれば賑はひ避くや寒鴉
絵手紙に拙句を記すや春近し
陰干しの絹のスカート春近し
春立つや木立に淡き杖の音
老いたれば鄙に遊ばむ揚雲雀

さいたま 秋谷風舎

病してお陰様見ゆ春隣
春隣終活ばなしは置いといて
春隣つかまり立ちの得意顔
寒鴉乗せて貨物車動き出す
暇な老の相手せんとす寒鴉

さいたま 門真宏治

たましひを天使に売りし百合鷗
近づけばちよこちよこずる百合鷗
飛ぶことを忘れたるかに百合鷗
海光る石の手摺に百合鷗
恋人の聖地百合鷗は一羽

吉川拓真

酔漢のはしご誘ふ冬座敷
木曾節の正調しかと囲炉裏端
手の皴を見入る孤老や息白し
漢らの料理教室牡丹鍋
爺婆の遠き日のことクリスマス

香田裕誌

万両の赤で裾埋めお生花よ
寛解の友と行きけり冬紅葉
駅伝の往路のドラマ二日かな
招き猫のあふるる古刹初詣
念願の五島の旅や春を待つ

森下美智枝

春一番坂道に来て息みだれ
竹林の風賑はしき春一番
小旗振る道路工夫や春一番
春一番片足立ちの不安定
良き声の僧の読経や春一番

若狭 山崎郁子

人寄せぬ目差で鳴く寒鴉
観てをれば餌を吟味の寒鴉
招き猫納むる冬至豪徳寺
意気込むも締切迫る初句会
万両の鉢植ゑでんと鎮座せり

小川洋子

出初式若手の鳶の決めポーズ
除雪機の音に目覚むる隠居部屋
春待つや仁王立ちするゼロ歳児
二人まだ出来る喧嘩よ春一番
角刈の垣根の影や春の月

松村笑風

すり足の歌舞伎女形や阿国の忌
大岩に泣き仏あり冴返る
北国の球児の素振り春を待つ
幼子の幸を願ふや若葉の日
見上ぐれば段畑天へ春日和

若狭 畠中風花

春雨や大地の命目覚めたり
古き良き時代語りて春炬燵
春炬燵主役を下りて部屋の間
耕して鋤の重さに老いを知る
船縁に波ひたひたと日永かな

若狭 森下風湖

輝の指で奏づる二小節
海沿ひの道の日の出や淑気満つ
晴れの日や輝の手の置きどころ
イヤフォンを外し一札淑気かな
初景色架け替へられし跨線橋

川口 新井のり子

立春の庭木の滴輝けり
春浅しボール追ふ児の影見え
玄関の花瓶の拾ふ春の色
坪庭に老木の梅仄かなり
古土を少し纏ひて露の臺

西川 夕月

立春や帽子ま深にかぶりたる
初鏡術後の視力一・五
ただいまも言へず伝ふる冬夕焼
輝を知らぬ乙女の真白き手
淑気満つ三崎港へ大漁旗

木村 小麦

春の水指をくぐりて空の色
立春や子の靴先に日の匂ひ
水温み米研ぐ音も軽やかに
法螺貝の響く鶉の瀬や水温む
春一番仕舞ひ忘れのバケツ飛び

佐野 友夏

弦に触れ響く一音淑気かな
輝や妣らの努力が世をつなぎ
固く絞り拭き清むる手あかぎれて
歩道橋一段ごとの初景色
吾子負うて夫待つ橋に冬の月

加藤 みち

輪飾りをつけて貰ひし三輪車
まろき背をきりりと正し筆始
成就せぬ達磨どんどの火となりぬ
三代の住まふ大屋根冬館
口笛を誘ふ日和や水仙花

さいたま 穴戸 洋子

開運を眉より始む初鏡
少年に少女の混じる喧嘩独楽
水仙花コーラの瓶の細き口
調律の揺るる半音冬館
灰色の海に航跡冬館

上尾 室井早都子

彈初や内海を行く日の光
漁火を蹴り立て上がる寒鰯や
鈍色の隅田を低く都鳥
都鳥人は他人の貌で過ぐ
凍雲や伝ふる指示の宙に消え

さいたま 前田夏野

白梅や介護の昔語りして
梅園や小声ささめくフランス語
唄ふごと交はす「バイバイ」冬桜
御仏の前でゴスペル寒明くる
料峭やためらひがちに笑ふ君

大阪 遠藤人美

向島黒板塀に福寿草
またまみえん父の好みし福寿草
儂くも金とガラスの福寿草
媪ふたり三寒四温カート押す
バス停に明日は四温と交はず声

東京 山中いちい

春動く山に一筋猷道
春めくや髪にピンクのメッシュ入れ
春兆す色取り取りの京生麩
初午のキュポラ夜空に噴火して
初午の揃ふ半纏茶碗酒

さいたま 北山建治郎

雨近き羽根を休めて海鵜かな
目眩く風を抱きしめお花晶
薔薇の園竜宮城の秘密ごと
青葡萄明日を生きる花言葉
穢れ無き宝物ごと新茶汲む

所沢 関根千恵

蒼天を蹴りて逆立ち梯子乗り
出初式木遣りの声の空に舞ふ
初春や付けの響動めく大睨み
洞門をぬけて岬に野水仙
背負籠に水仙香る浜小道

石黒由美子

春隣何処へ行こうか「るるぶ」買う
補助輪を外した子の目春隣
老農婦働く畑に寒鴉
鶴となり自由に飛べと初みくじ
賀状来る盾持つ友の乗馬服

さいたま 三浦真由美

訛から伝はる北の雪景色
爪崎すいせんの波青遠し
凍てつく夜屋台に走りおでん酒
関東煮レッスン帰りや友と食ぶ
ガード下おでん談義や賑賑し

さいたま 榎本道代

荒るる手の消えし二日目寝正月
隙間風乱れ始むるチームの和
初春や伽藍ふるはず大太鼓
冬うらら遠出してみる一日かな
形見なるブローチ付くる白セーター

さいたま 大神満智子

隙間風座卓を囲む腰屏風
曲家の馬屋に入る隙間風
隙間風廊下に薄く砂の線
乙女らのひそひそ話寒の紅
黒髪に鉢巻きりり寒の紅

湯浅 和

強東風や肌寄せ合ひし猿親子
椿東風地蔵に祈り託すなり
夕東風や夫の帰りを首長く
春遅し友との再会果たせずに
皮のはがるる古木と対話二月なり

和歌山 南條さわゑ

声色の自在なインコ春隣
丙午の嫁ぎし異国春近し
転職は事後報告や春近し
禍事を吸ひ込みたりし冬夕焼
寒鴉に試さるるかなゴミネット

木谷葉子

柵を鯛に挿してドアの上
立春や菜のみそ汁に豆ごはん
春めきて半音高く四十雀
針供養「お疲れ様」とそつと挿す
夜店ならシロップ掛けむ春の雪

さいたま 駒谷行雄

結ばずにそと懐に初みくじ
餌あさる街の鳥の三が日
迎春やよくぞここまで七十五
初春や無口な猫のミャーかすか
鯛焼の頭からかの初問答

北出久美子

寒紅を贈られし嫁照れ笑ひ
寒紅を引きて墓参や夫の元
ハンカチを振りてさよなら春の風
命中の矢羽根の音や春の風
一鉢に白黄紫クロッカス

武田重子

AIの応答瞬時春の雪

さいたま 田口文子

下萌に生きる力が湧いてきし
下萌やテニスコートに歓喜湧く
薄氷を駈けわたる鳥羽ばたけり
薄氷や水底の影ほぐれをり

人生は真理の軌跡冬銀河
太極拳心身ほぐれ日脚伸び
馬車に乗り春駈け巡る野を山を
春めくや夕刻の空微笑める
真宗の教へは優し春の雪

宮代 関谷多美子

水温む音無川の水車かな

小野町子

さいたま 石井直子

初午や「いなり坂」てふ標立つ
初午や火防の風の並びある
初午や本殿奥のお穴様
春めくや展望のよき北とびあ

寒鴉静かに暮るる宿場町
春隣開店近きレストラン
春隣道にチヨークの花模様
雪しまく朱き瓦の鶴ヶ城
ちぐはぐに動く日時計うらけし

雨粒のゆつくり滲むる春の土

播磨 進

大阪 海老名ノルン

春寒や出張先の会議室
雪解川踊り狂ひて日本海
隊列を組みたる園児春の風
春日和都電の先に歩く鳩

菜飯食ふ田舎の彼の人思ひつつ
春浅し走り回れり選挙カー
春浅し令とおじさん引退す
春一番バケツのひとつ転がりて
東風吹かば思ひ出さるる父の顔

三代に犬も加はり豆を撒く

鬼石 榊原聰子

和歌山 嶋田洋子

憧れは山の彼方に春の空
積りてもはや消えてゆく春の雪
ゴルフ場に羚羊の出で冴返る
実方面幼子スキップ上達し

立春や朝しほり酒飲む卒寿
梅東風や一輪ひらきそめし庭
雪だるま一夜をかけて豊満に
湖の厚き氷に舞ふ天使
ナルシスト池に映るは水仙花

切り株に座りし小さき雪達磨
冬空に笛鳴り響きノーサイド
寒の水うどん晒す手かじかみて
風花をつかまへんとし空にとけ
寒風や架線にビニール列車止め

さいたま 三森恵子

ひたすらに筋トレ励む四日かな
馬柄のブックカバーの初句会
ビル街を自由気ままに都鳥
百合鷗水上バスの舳先立つ
骨密度増量したしシクラメン

さいたま 樋口元美

上下の脛を閉ぢて春を待つ
窓の下には雪合戦の子供達

東京 桐山遊童

春星や歓喜のメダル胸に咲く
山伏の法螺貝遠く春の星

緒方みき子

熱爛を飲んでゆるゆる帰る道
給料日思ひきりよく河豚食らふ
冬枯れや君の心に何を言ふ

寝転がる親子でクイズ首稽
山羊放つ四つ葉のクローバ無念なり
五十本束ねて甘し白詰草

夕暮れてブランコ揺らす受験生

柳父はる

しなやかに炭を置きゆく師の点前
冬の日や昔話をたどる旅

稲野幸子

薄紙はぎ笑みのこぼるる雛かな
春立ちてあれやこれやの一日かな
校門の日の丸の下入学す
落椿金色の蕊そのままに

出発のデッキ翔び立つ都鳥
朝焼けのデルタに遊ぶ都鳥
待ちわびた遅延の電車冬の月

山茶花の散りつつ明日もありぬべし
聖夜更け扉飾りを外しけり

さいたま 小山泰生

山の背の石仏めきて冬の暮
不覚にも乗り越しするや冬の暮
冬の暮一番乗りの予約席

所沢 飯室夏江

初春や今日も鴉が芥さがす
初雀こゑ撥ねて空明けそむる

重さ増す四代目を継ぐ沢庵石
沢庵や派手なネイルでつまみ食ひ

投票日雪降る街行く車椅子
リハビリの散歩は歩行器梅の道
母娘孫時代を語る雛飾り
三世代異なる顔の雛人形
早春の空黒白シヨールの鶴

藤 沢 小島喜代子

雄猫にスイッチボンと春の風
昼日中横になりをり春の風邪
鮫鱈に有無を言はせぬ吊し切り
池中の鯉みじろがず冴返る

さいたま 鈴木藻好

小春日や額の皺もゆるみをり
寒九雨乞ひてる坊主逆さにす
小さき町の名もなき公園梅開く
せせらぎを子守唄とす猫柳
猫柳つけたる帽子いつ脱ごか

東 京 清水美千子

春日野の茅葺きの宿炭爆ずる
御祭警蹕ウツリの声闇に満つ
御祭火の粉の道に神を追ふ
凍星の浄暗の杜照らしをり

横山礼子

春隣切株となる枯損木

さいたま 今西 操

着ぶくれてみ空の青の深くなり
車椅子の母の背包む冬夕焼
薄氷の一葉閉ぢ込め漂へる
冴返る文字の薄れし木歩の碑

羽島秀子

春隣メタセコイヤはトトロの木
寒鴉会話の輪には人の無し
強風に足すくはれたる寒鴉
古顔の誘ひのライン春隣

菅原靖子

間伐し風舞ふ里や炭煙る

糸井しるく

箱根路の襷の色に淑気満つ
訪問着帯のきしみに淑気かな
パーカーの陽の匂ひ背に若菜野へ
久に逢ふ心に若き寒紅を

伊藤美津子

傘寿過ぎ丸き背も良し初鏡
跳元結栄を束ねて初鏡
粥食みし齡の友よ寒卵
沸湯に青菜入るるや春の湯気

さいはての海きらめくや春立つ日
軽やかに水の音響く春キャベツ
健診票夫むつつりと蜆汁
異国へのメール返信「こちら春」

青き空語り合ふごとねこやなぎ

卒業に真珠の首輪プレゼント

木瓜の花通り行く人にほほゑみて

若き日や真鶴岬春の海

東京 大島千恵

訃報

元季音花欄作家 福田藤十郎 様

お病氣にて去る二月三日ご逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。

横浜 石井妙子

三寒のお汁粉肩凝るスーツ
積雪は椿の形に北の国

季音雪欄作家 小倉 倭子 様

蝦夷鹿に祈り捧げて食ふ寒夜

お病氣にて去る二月二十八日ご逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。

東京 中村まどか

風待草ごつごつけれどつんとまるむ

寒の水眼力強き不動尊

寒九の夜分け合ひて飲む缶珈琲

水清き春菊入れてしやぶしやぶを

啓蟄や鼠とらなくなりし猫

春愁や晴れ着の裾の乱れをり

二月尺猫は鼠を追ひもせず

隣席の幼女の笑顔春の昼

さいたま 山下ユリ子

季音雪欄作家 井上 燈女 様

お病氣にて去る三月二十七日ご逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げます。

作品鑑賞

山本鬼之介

廢道に庚申塚の凍つる後夜

皆川更穂

本句に書かれている「庚申塚」とは、「庚申信仰に基づいて建てられた塚のこと」であり、別名「庚申塔」とも言われて「青面（しょうめん）金剛」が祀られ、三猿の形が刻まれている。この庚申塚（庚申塔）は江戸時代に多く建てられた塚のことである。

その付近の人々の信仰に基づいて建てられた庚申塚のある道は、往時には人が行き交っていたが、今では使われぬ道となり、朽ち果てた道になってしまった。当然のこと庚申塚も哀れな姿になってしまったことであろう。深々と夜の更ける時刻、冷気がすっぱりと庚申塚を包み込んでいる。作者がこの庚申塚の側に居たとしたら、塚と共に厳しい寒気を身に纏い、在りし日の街道の塚と旅人の姿を眼裏に描き出したのである。この俳句から、多くのことが連想できる作品である。

野仏に夕日のあたる雪野かな

反町 修

野仏の在す場所としてすぐ思いつくのが安曇野であるが、この句の設定が長閑な春の野ではなく、雪に覆われた野であるから、野仏の孤独感がひときわ強く感じられる。胸のあたりまで雪に埋もれた石の野仏に夕日が射している。辺りの雪が夕日に染まり、素朴な野仏を神々しい御仏の姿に変えているのである。やがて陽が沈み、寂しく厳しい夜がやってくる。

春日射す普段届かぬ書齋まで

倉田星歩

一読して平易な俳句に思えるが、読み返すうちに「何で」という疑問が生まれる。「季節の移り変わりで陽が家の奥まで入るようになった」と解すると、「普段」の意味に適合しない。ぴったりする解釈として、何らかの事情によって隣家が解体され、遮蔽物が無くなったので書齋に陽が入るようになった、と言うことだろうとの結論に達した。日常の小事ではあるが、俳句になると思考が広がるので面白い。

口紅の折るる酷寒今朝の黙

阿部幸代

不吉な事を予感する事例として、普段身近に使っている物品が壊れたり折れたり千切れたりする場面を、テレビドラマなどで視ることがある。女性の場合は櫛や手鏡、草履の鼻緒、帯締めなどであろうか。

掲句の口紅もその一例にあたる現象であろう。何らかの条

件が重なって折れたのであろうが、厳しい寒さの朝の気分を大いに損ねる現象であろう。験担ぎの傾向の強い人なら尚更である。同居の家人が心配するほど沈黙を続けている。

寒鰯や波の泡舞ふ日本海 寺町知子

出世魚の代表とも言える鰯。体長が一メートルにもなる大魚で、寒中の鰯を寒鰯と呼称して特段に美味である。筆者が勤務していた会社の工場が、山形県の鶴岡市と新潟県の中条町（現・胎内市）に在り、出張の時や顧客の接待で寒鰯を食する機会が多かったので、その味が懐かしい想い出の一つになっっている。

さて、本句は寒鰯を軸に置き、夏季とは逆の荒海と化した冬季の日本海の猛々しい姿を、中七の措辞できりつと表している。また、季重ねを避けて「波の花」を「波の泡舞ふ」と書いたところにも作者の力量を認める。

絵馬にあるアラビア文字や初詣 田中弘子

「アラビア文字が使われている国は」で検索すると、AIによる回答として、「アラビア文字は、主に中東・北アフリカのアラブ諸国と呼ばれる22の国と地域で公用語として使用されている」が表記される。今、アメリカ、イスラエルを相手に交戦中のイランは該当しないようだ。

我が国の日常生活には縁遠いアラビア文字が初詣の神社の

絵馬に書かれていたことに先ず驚き、それから、絵馬を書いた人がどこの国の人か、年齢は？、日本に在日しているのか旅行で来たのかなど、いろいろな思考を巡らしたことであろう。最も興味を持ったのが文字が表す内容であったと推察する。

青空に罅薄氷にピンヒール 森下山菜

針のように尖ったハイヒールがいま薄氷を踏んだ。当然のこと罅が入る。と同時に薄氷に映っていた青空にも罅が入る。この句の作者の作品は、筆者の思考回路では探り得ないものが多く、作者の思いはもつと別のところにあるようにも思える。作者が仰ぎ見ている完璧な青空に、ピンヒールの女がずかずかと踏み込んでゆくような印象を抱いたのだとすれば、いくらか増しな解釈になるうか。

触れたれば幼心に猫柳 丸屋詠子

早春の小川の畔。猫柳に出会える場所として最適で、多くの人が幼時に体験している原風景のような気がする。数十年経って同じような場所で猫柳に触れた時、一気に幼子に戻ったような気持になるのである。日射しいっぱいの廊下で目を細めて喉をごろごろ鳴らしている猫のように、他の草花には無い温かさを持つ猫柳である。

冬の夜や息子の遺影にらむ吾 飯田忠男

数年前、病気でこの世を去った作者の次男。働き盛りの壮年の死であっただけに、時が経っても悔しさが治まらない。掛け時計の秒針の音が聞こえるほど静かな冬の居間。飾つてある遺影に向かって、「何で俺より先に逝ってしまったんだよ」と、無言の恨み言を述べている作者である。

春蘭や生まれし 柚を焦がれ咲く 岡本祥子

何時の日か、柚山に咲いていた春蘭を持ち帰り、鉢植えにしたものであろうか。今年もその時季に咲いてくれた。その姿を観て劳いの言葉を掛けたくなった。作者の気持がしっかりと伝わってくる心温まる俳句である。

母のぼる 天使のはしご 春隣 平野 楽

今年の晩冬に母上が亡くなられたのであろうか。そうだとすれば、まことに心の籠もった追悼句である。温かくて明るく、そして、洒落ている。「天使のはしご」、このフレーズが実に佳い。

猫二匹 沈丁の香にまどろみぬ 綿引まりこ

春の日差しがいつぱいの廊下で微睡んでいる猫。庭に咲いている沈丁花の香りが猫にも通じるのか、時折鼻をひくつかせている。当然のこと、人も眠りに誘われる仲春の昼下りである。

春立ちぬ 声の限りの朝稽古 川島夕峰

下五に据えられた「朝稽古」という言葉から思い浮かぶのは武道であり、次に中七の「声の限りの」で剣道であると判断した。町の中にある剣道の道場か、或いは高校か大学の剣道部の朝稽古であろうかと思う。あの独特の鋭い気合の声は、臨場する者の気持までも引き締める力がある。立春と言えども朝の寒さは厳しい。朝の寒気を震わせる大きく鋭い声がこの句の中に満ち満ちている。

灰色の街を俯瞰の寒鴉 菅原真理

「灰色の街」という言葉から感じるイメージは、寒気の中でまだ眠りから覚めない明け方の街である。鴉の群れの長が己の縄張りに異常が無いか、今日の餌場はどの辺りかなどと窺っている様子が見えてくる。「俯瞰」が効果的である。

弾初は「春の海」より音合はす 岡田宣子

日本を代表する箏曲家で音楽家の宮城道雄が昭和四年に作曲した曲で、「瀬戸内海の穏やかな春の情景をイメージした箏と尺八の二重奏曲」と説明されている。正月のテレビやラジオ番組のBGMとして使われているので馴染み深い曲である。しかし、近年はテレビからこの曲が流れてくることが殆ど無くなり、正月気分になんか出てくる曲が出来なくなつて寂しい。

琴の初稽古であろう、この名曲から音合わせを始めて皆の音が揃ったところで稽古に入る。優雅な時が流れてゆく。

頂上の見えて道なし冬の山 小林京子

本句を文字通りに解釈すると、頂上から七合目更には五合目辺りまでが雪を被った冬山で、山の頂へ至る道筋が隠されているというようなことになるかと思うが、根底には作者のこれからの人生設計というテーマがあるように感じる。最終目標は明確であるが、どのような過程でそこへ到達するのかが見えてこないのである。眠りから覚めない冬の山に象徴される曖昧模糊とした感情なのである。

野焼かな戦国武将の影揺らぐ 霜多光代

点火された火が燃え広がり、野が一面火の海と化す。其処は昔々長槍を持った雑兵や甲冑に身を固めた騎馬武者が鎬を削った古戦場である。立ち上る白煙や黒煙、そして立ち上る炎が猛り立った武将の姿に見えた。

擬宝珠に集まる光初日の出 畑宮栄子

牛若丸が弁慶を翻弄した京の五条大橋を思い描く擬宝珠である。神々しい初日が擬宝珠に集中して光を放っている。

鉄筋コンクリートの近代的な橋も良いが、擬宝珠に飾られた昔ながらの木の橋が、人の心を和ませる。

華やかに春着の異人浅草寺 杉浦千祐

浅草寺の初詣風景である。普段に増してその混雑ぶりが想像できる。貸衣装の春着を着て記念写真を撮っている外人の女性であるが、以前と違って今は着付師が本格的な着付けをするので違和感が無いようだ。

作者もさぞかしお疲れの一日であったことだろう。

受験子の付箋だらけの参考書 元田亮一

勉強机の側に積まれている各教科の参考書であろう。本人しか解らない分類の方法で付箋が沢山貼ってある。見事志望校に合格すれば、付箋が宝物のような輝きを発することであろう。

喪主といふ終の妻の座冬の菊 本橋稀香

昨年末に逝去された作者の夫君の葬儀会場を飾っていた冬菊である。いよいよ出棺の際に、その菊を家族親族や会葬者の手で棺にいれて飾ったのであろう。葬儀の喪主として毅然と対応した自分にとって、これが妻としての最後の働きであったことをしみじみと実感しているのである。

春の夜や残すか迷ふ留守電話 石関六弦

家の固定電話か或いはスマホに入っていた留守電。用事は済んだが、残すかどうかを迷うその相手とその内容である。

水琴窟

(水明集三月号鑑賞)

池田雅夫

江の電の窓に小春の海あかり

宍戸洋子

鎌倉から江の島にかけて海岸線を併走する「江ノ電」。七里ヶ浜近辺であろう。南は広大な太平洋。冬の海の印象は暗く荒寥としたものであるが、「小春」の穏やかな一日。民家をかすめて通る「江ノ島電鉄」の景観や親しみやすさが、「小春の海あかり」に重なり、ふっと一息ついている。

空風の吹く上州の湯宿かな

森下美智枝

俗にいう「赤城おろし」など、上州の空っ風は広く知られている。また、上州には草津温泉、四万温泉、水上温泉と、有名な「湯宿」がたくさんある。「空風の吹く上州の湯宿」と漠然と詠んでいるが湯宿を特定して、「空風の上州湯宿石段街」とすれば伊香保温泉であることが明らかである。

山茶花やこぼるる先の通学路

小駒さち子

「山茶花」が「通学路」に敷きつめるように散っている。その華やかな道をゆく学童。「山茶花や」で切り、強調、詠嘆の効果を期待しているが、「山茶花のこぼるる小径下校の児」のように、「や」で切らなくても句意が伝わるだろう。

玄関に夫を待たせる初鏡

松村笑風

「初鏡」に向かい出かける仕度をしているのだ。正月の外に出にそなえ、いつになく念入りに化粧しているのである。玄関には準備を了えた「夫」が待っている。「おおい、まだか」と急かせる中を、「はい、はい、今いきますよ」と言いながら終わらない。円満な夫婦の一年の始まりである。

きびきびと消防訓練小春風

樋口元美

各市町村には消防署がある。日頃から「消防訓練」を重ね、いざという時に備える。一刻も早く「きびきびと」行動しなければ人命にもかかわる。また、地域住民による消防団も合同で訓練することもある。「小春風」の親しさ、和らぎが消防訓練の緊張感を解す働きをしているように思う。

冬暁のとうふ納豆売りの声

関谷多美子

ラッパを鳴らしながら「とうふ」などといい、また、「納豆屋でござい」などの売り声はとんと聞かれない。「冬暁」であるから朝餉の仕度に間に合う。「売り声」の特徴でいつもの豆腐屋さんと分かり、安心して買い求めているのだ。

長風呂は性に合はぬと湯冷めせり

加藤みち

梟や声と羽音に闇動く

緒方みき子

「鳥の行水」といわれるように江戸っ子は熱い風呂にさつとつかって出てしまふ。そうした習性をおもしろく詠んでいる。「湯冷めせり」と言い切っているが、「父湯冷め」と、偏屈な父を登場させることにより具体性が増す。

極月に線香薫る泉岳寺

桐山遊童

捨つるもの山とつまれて大晦日

山下ユリ子

東京芝高輪の「泉岳寺」の境内には浅野長矩の墓と赤穂義士の墓がある。赤穂にゆかりの人だろうか。ひっきりなしに焚かれる「線香」の香が漂っている。「極月や」と、切れの効果を活用すると、より力強く感じられるのではないか。

浅き冬樟脳の香とすれ違ふ

山中いちい

冬散歩にぎりこぶしに息を吹く

南條きわゑ

冬のはじめ、厚手の洋服に変えたのだらう。防虫剤として用いられる「樟脳」は独特の香りがあるのですぐに分かる。清楚な和服の人だろうか。どんな暮らしをしていて、何をしているのだろうか、などと詮索してみたくならないもの。

初冬や磨き丸太を干す山家

石黒由美子

酉の市禍福のごみを掻き集め

持永喜夫

建築用に伐りだした「丸太」であろう。床柱などに多く用いられる丸太は生木のうちに皮をむく。そして充分に乾燥させてから「磨き」をかける。厳しい冬の「山家」の生業。

梟は羽音をたてずに背後から獲物に迫るといふ。「梟の声と羽音に」では「闇動く」で、条件と結果になり兼ねないと、「梟や」と工夫したのだから。「梟の声や羽音や」のようにもう一步踏み込んで、そのちがいを考察することを推める。

年末の大そうじは限りがない。「あれも、これもいらぬ」と決心し、不用なものを処分したのだ。気がつけば「山とつまれて」の状態。だれもが体験したことがある。「山とつまれて」と「大晦日」の間合いに安堵感がただよっている。

日課にしている「散歩」であろう。今朝は、ことに冷え込みが厳しく、気合いを入れて歩きだした。手袋をしていても冷気が指先をおそう。つい、「にぎりこぶしに息を吹く」状態。その寒さの度合を計り知ることができ、共感する。

「酉の市」で売られる「熊手」は縁起物で、福徳を掻き集めるといふ。掲句は「禍福のごみ」を掻き集めている。禍福でのごみとは何であろうか、と想像させるところに趣がある。

網野月を選

山紫集

春立つやそつとレットル剥がす時

石関六弦

立春大吉河童の謝意は鮎二匹

森下山菜

立春や居間の隅なるほこり舞ふ

畑宮栄子

立春や明るき声で祖国踏む

南條さわゑ

春立つや旅のパンフの碧、緑

前田夏野

駐輪の光る泥除け春来る

曲淵徹雄

立春の口角上ぐる閻魔像

正木萬蝶

立春や吉夢は胸に仕舞ひ置く

松宮保人

春立つや開く旅行のパンフレット

松村笑風

スカートを衝動買ひや春立てり

丸屋詠子

立春の「次止まります」鈕押す

皆川更穂

立春の藍甕の泡立ち上がり

池田瑠子

春立つや田の目覚め欲^ほり畦を行く

丸山マスマ

立春の天地普く光かな

池田雅夫

立春のゆるつと上がるブルトツプ

石田慶子

賽子の目の揃ふ刻春立ちぬ

元田亮一

立春の八百屋ほのかに野の香り

阿部幸代

——以上特選

オリピック選手の妙技春来たり	宮崎チアキ	追伸に再会の約春立ちぬ	横山礼子
立春や未だをさなき鳥のこゑ	室井早都子	立春の雲がくれにし夜半の月	吉川拓真
立春の風に五分刈り耳を出す	持永喜夫	立春やダイヤモンド富士の後光	綿引まりこ
新作のショーウィンドウ春立つ日	本橋稀香	立春の雲はんなりと張りにけり	秋谷風舎
立春や日差し溢るる授乳室	森 和子	立春や妻のバッグに朱印帳	新 曆文
立春の湯島天神牛撫でる	森下美智枝	春来るおんもに出たき小さき靴	荒井俱子
立春に学び再開老い飛ばす	山岸久美子	立春のバーガーショップ日の強く	新井のり子
春浅し古事記初版本を読む	山下ユリ子	立春や句会の友のネックレス	飯田忠男
立春や小さき靴履き第一歩	山戸美子	擦り傷は子の勲章や春立つ日	石川理恵
立春や温泉饅頭湯気の中	山中いちい	立春や雨戸を叩く夜半の風	糸井しるく
春来るわづか持ち上ぐ黒い土	湯浅 和	体幹を鍛ふりハビリ春立てり	内田恵子
補修芝植うる庭園春立てり	横山君夫	甘美なる香や立春の貴腐ワイン	梅澤佐江

春来る砂場の水やあぶく立つ	梅澤輝翠	立春や少し伸ばせし試歩の杖	笹本啓子
立春のサラダボウルに色を足す	遠藤人美	立春や広野に息吹土返す	篠原さよ子
春立つや机上の埴輪双手上げ	大場順子	待ち侘ぶる地球に微熱春来る	渋谷きいち
立春の光大地を呼び覚ます	岡田宣子	立春や赤子の生毛陽に光り	嶋田洋子
春立つや恥づかしさうに顔出す芽	川島夕峰	両の手に立春掬ひ洗面す	清水桂子
春立つやバーの紫煙に男の香	北山建治郎	春立つや豆大福の塩加減	下川光子
立春の明けの梵鐘心地良く	倉田星歩	薄絹の如楚楚と春立ちにけり	霜多光代
立春や寝所に届く日のひかり	河野はるみ	初期化せしUSBの立春	菅原卓郎
眠りつつ笑ふ嬰兒春立ちぬ	小林京子	立春の夕陽は抱かれ隅田川	菅原真理
シート消え高層ビルや立春	近藤徹平	会ふたびに大泣きす孫春来れど	杉浦千祐
立春や風に緑の香の予感	榊原聰子	出しの香の先のうどん屋春立てり	穴戸洋子
白馬岳の稜線遙か春霞	佐々木史女	立春や妻が飛び行く特売日	鈴木藻好

立春や真白きホームベース踏む	鈴木玲子	立春や目覚めの珈琲湯気ほのか	野口和子
歳重ね立春在るが儘生きむ	関谷多美子	春立つや古家具店の古時計	野村美子
立春のシャッター街を東西屋	染谷風子	立春や伊勢湾望む干支の山	畠中風花
南国の球団キャンプ春立ちぬ	反町 修	立春の工場の空地や素振りの子	原田自然
春立てり厨の光なごみけり	高橋満耶子	出来立ての「伊勢の赤福」春立てり	原田秀子
春立つや少し贅沢旅の宿	武田重子	立春や鳥はくるりと枝揺らす	樋口元美
立春や破壊が進む武甲山	田中章嘉	衣擦れに鬼の移り香春立てり	日高道を
春や立つ稀土類元素眠る地に	田中弘子	立春や石の鶏鳴く夜明け	檜鼻ことは
春立つや出会ひと別れまた幾つ	寺内洋子	立春や一回二錠の頭痛薬	福田千春
立春大吉家出の猫の帰還なり	寺町知子	春立つや光も水もはんなりと	平野 楽
立春の喜怒哀楽はすぐそこに	飛永 鼓	ランドセル背うて写真春来る	保坂翔太
立春のひかりの中を鷺の群	西幅公子		

山紫集作品評

網野月を

立春の藍甕の泡立ち上がり

池田珪子

「立春」というと、ちようど菜（すくも）や藍玉の出来上がる頃合いであろうか。徳島の場合は幾分早いかも知れないが、秩父や北関東圏の藍は年を越えるのであろう。地中に埋められた「藍甕」の表面に「泡」が立ち上がってくると生産農家の仕事はまだ活況する。同時に今年の播種が始まるからである。時候の季語「立春」が農事に密接に関係していることを踏まえている。

春立つや田の目覚め欲り畔を行く

丸山マスマ

田園を散策している作者を想像した。「欲り」の措辞からは第三者を想定することは難しいのである。立春という季節の節目に「畔を」を歩きながら「田の目覚め」を願っているということであろう。つまり作者は「田の目覚め」を感じ取ろうとしているということである。立春を迎えて、田へ目覚めを呼び掛けているということである。

立春の天地普く光かな

池田雅夫

春と光は俳句の世界では常にテーマとされてきた事柄である。その王道のテーマに真正面から取り組んだ作句である。中七の「天地普く」の大胆な把握が見事である。作者の叫びだしたいくらいの喜びが表出されている。

立春のゆるりと上がるブルトツプ

石田慶子

缶物の「ブルトツプ」である。飲みものか、はたまた食材などの缶詰か、句中に情報はない。「ブルトツプ」を上げたシチュエーションなどの情報もないので、読者が景を描かなければならない。筆者は、立春の昼下がりに公園のベンチで缶コーヒーを飲もうとする人物を勝手に想像した。温かい缶コーヒーか冷たい缶コーヒーかは分からないのだが。

つまりマクロの景を想定しなくとも掲句は鑑賞できるのである。「ブルトツプ」を引き上げる時のあの独特な音質が読者に理解されれば良いのである。その独特な音質と「立春」が符合していると作者は言いたいのである。

賽子の目の揃ふ刻春立ちぬ

元田亮一

「賽子」は「采」のことであろう。俗にいうぞろ目になったということである。実際に双六でもしていたのか、他のゲームをしていたのかは分からないが、出目が揃ったのである。「立春」というと旧暦では新年を迎える日であって、その出目に一つの節目を作者は感じ取ったのであろう。作者の決心

を仄めかしているようにも解釈できるのだが、「春立ちぬ」の季語からは前向きな印象を強く感じる。

立春の八百屋ほのかに野の香り

阿部幸代

作者の感性の豊かさに敬服する。ビニールハウス栽培ではなく、路地物が出回り始めたという句意であろうと鑑賞した。まだまだ「ほのかに」なのであるが、「立春」という、俳人に限らず日本人にとつては節目の日に心が春に向けて展げて、その結果、「ほのか」な「香り」に気づいたということである。気づきへの愉し気な、そして嬉し気な作者の心の在り様を即物的に表現して成功している。

春立つやそつとレッテル剥がす時

石関六弦

何の「レッテル」なのであろうか。句中にヒントは無いので読者の想像に任されているということになるであろう。使用し始めた小道具のそれを想像すると具象性があってよいかも知れない。PCのCPUのシールかもしれないし、調味料の瓶のそれかもしれない。より観念的な解釈も許されている。人物像のレッテルということである。その場合、ペルソナを自ら剥がすという解釈も出来るし、他者が誰かの仮面を剥がすとも解せるであろう。その部分は読者に任されているということである。問題は、その「剥がす時」が「立春」なのかという命題である。筆者は、旧暦の年の初めを想定するし、また人的移動の始まる季節でもあって、「立春」の時間設定が遠隔に句意と関係性を有しているように解釈した。

立春大吉河童の謝意は鮎二匹

森下山業

洒落の効いた句意である。新美南吉作の「ごんぎつね」を想起させるし、また季語「鰻魚を祭る」のイメージも重なっている。春という季節は何やら楽しい想像を掻き立てる季節なのである。

立春や居間の隅なるほこり舞ふ

畑宮栄子

春というと冬の季節を過ぎて、徐々に光が満ち始める季節であり、光の溢れる感性を先取りするところに俳句で表現するところの季節感の本質もある。つまり日本人の季節感はその先取りということなのである。「居間の隅」に日差しが差しこんで、「ほこり」をキラキラと浮き上がらせている。専門的にはチンダル現象というそうだが、日常生活の中に垣間見ることの出来る景である。「隅なるほこり」は稀な表現であるが、その分新味も感じることが出来る。

立春や明るき声で祖国踏む

南條きわゑ

お知り合いの方が海外から帰国されたのでしょうか、それとも作者ご自身が何処か海外へ旅行をされていたのでしょうか。座五の「祖国踏む」の表現にはどちらかを想像させる意味合いが含まれているであろう。帰国された方を迎えたのか、または帰国されたのがご自身であっても中七の「明るき声」が上五の季語「立春」に符合して揺るがない。季語と句意の合致した句作りである。

熊谷春の吟行会の記

青木鶴城

雲一つなく汗ばむほどの絶好の吟行日和となつた三月二十九日、八年ぶりに熊谷に於いて「春の吟行会」が開催され、参加者六十九名が熊谷の地に題材を求めました。

残念ながら桜堤の桜は八分咲きではありましたが、熊谷直実の銅像、星川、ラグビー等々色々な題材が詠まれました。

山本主宰より「かな女晴れ」です、とご挨拶を頂き句会へと入りました。

選句 主宰は多選

雪欄作家は十句選

一般は五句選

披講 日高道を

菅原卓郎

主宰詠

さくら咲け咲け馬上軍扇高高と
春陽燦燦胸にどかんと兜太の字

主宰選

三極(天・地・人)

天

花のたてがみ武州を奔る暴れ川

地

蒼天に桜の紡ぐ江戸小紋

人

昇

喜 恵

老樹なほ余白埋め行く朝桜
超特選

健気なる古木の力桜咲く

果しなき絵巻の如し花の土手

いたはりつ歩む九十桜満つ

遠目良し近寄りてよし花堤

春帽子荒川土手をまつすぐに

小町の名持てる桜の矜持かな

咲きみちて二キロの画竜桜土手

赤ん坊の軛がつてある花筵

生命ある限り華やく老桜

生きてこそ堤にけふの桜かな

特選

五分咲きへ黄の風おくる野の起伏

銅像に銅の扇や遠桜

人に酔ひ景色に酔うて花疲れ

川風の指揮に菜の花たゆとうて

地に桜空に天女が薄ごろも

川風と呼ばれ堤の桜人

近よれば満面の笑み桜花

熊谷椿張り合ひ我ら橋に立つ

目をあけて目を閉ちて見る桜かな

しだるるは京のゆかりの孫桜

菜の花に背を預くる娘たち

菜の花やをみなに親し吟子像

秩父嶺のかすむ山の端花八分

卓郎

栄子

順子

章子

京子

隆文

萬蝶

茂子

森和子

宣子

君夫

ひろこ

桂子

道

穂

更

和

千

西窪

千

詠

幸

順

卓郎

子らを抱く川守地藏花の陰
 直実公を語る街人花の昼
 スキップのポニーテールや桜道
 今生きて令和の花の輪の中へ
 楢円球ただ追ひかけし春の午後
 SLの汽笛に桜歌ひだす
 吟行や春の日差し^の当たる席
 さくらさくら歩幅の揃ふ二人連れ
 欄干に一つ置きたる落椿
 樹齡二百年の枝垂桜に異邦人
 直実の姫の名つきし桜濃し
 直実に留守を任する花見かな
 赤椿ほとり落ちても赤椿
 菜の花や子守地藏の目の静か
 五家宝のきな粉頬張り桜愛づ
 普通選

徹雄 真理 翔太 行雄
 ひさの 隆文 節代 直子 千春 萬蝶 尚己 惠美子 鶴城
 森和子 由美子 邦人 宣子 幸代 公子 徹雄

花八分犬が乗つてるベビーカー
 幼な子のショットをねらふ花の下
 西行を慈しむかに飛花落花
 焼いかの匂ひかすめて花の下
 青と黄の天地を繋ぐ花並木
 菜の花やアーバン号の窓に飛ぶ
 六・七分咲きし桜やワントライ
 青空に枝つき出し花満開
 老木の桜に負けじラグビーかな
 春愁やただただ広き河川敷
 空にドローン地上に菜花日和かな
 熊谷のブロンズ像に春の風
 花づかれ稚児は父の背に
 にぎはふ屋台ソフクリームに花片
 青天の熊谷堤桜満つ
 春光や駆け抜くるかに直実像
 花訪ね道聞く人の西詠り
 そこかしこ花菜の中に子らの声
 子らの声桜堤を風にのり
 春の空武将椿の潔さ
 清清し馬酔木に惹かれ石だたみ
 花愛づる乙女のやうな瞳して
 菜の花や堤はうねり浄土まで
 花見客自撮りする手は左利き
 生き継がる陣屋の桜七重八重
 朝桜蒸気機関車けふ当番

徹雄 真理 翔太 行雄
 ひさの 啓子 節代 直子 千春 輝翠 かつ子 直子 君夫 眞美子 惠美子 妙子 関久美子 栄子 徹平 道を 延昭

仲違ひして仲直りして桜さくら
 長堤の万朶の櫻帛の色
 黄花敷く堤包むや花の雲
 グライダ―のゆるり旋回花堤
 さくら満ち平穏な空とこしへに
 星川沿ひに空襲の碑や春愁ふ
 敦盛を招く直実花の雲
 逢へぬ日は花は朧となりにけり
 遠景に山見ゆ桜堤かな
 花堤デコイチ聞こゆ七分咲く
 直実の情愛溢る花日和
 花散るや無数の出会ひあるごとく
 花咲いてムサントミヨに会ひに来る
 桜咲きSLの汽笛空青く
 桜にも世代交代我らにも
 壮年ラグビー逸れて菜の花踏み分くる
 熊谷の歴史も語る薄桜
 星溪園のガイド饒舌熊谷椿
 春愉しグランドに舞ふ楢円球
 長堤は桜並木や桜色
 頼齡の幹にはにかむ花一朶
 直実公と五家宝とわたし春の昼
 星川の流れ鎮むる落ち椿
 熊谷次郎直実春の駅
 百選を誇る堤の万花かな

多美子 風子 更穂 京子 美智枝 佐江 マスミ 喜恵 章子 しろく 千アキ 拓真 隆然 恵子 和葉 千祐 西窪弘子 眞由美 寿夫 山岸久美子 田中弘子 慶子 知子 詠子 鶴城

天・地・人の三極には主宰より色紙、超特選には短冊が授与され、互選による高得点者には水明より記念品が贈られました。

高得点者

- 一位 菅原卓郎
- 二位 森 和子
- 三位 五明 昇
- 四位 今西 操
- 五位 大塚茂子
- 六位 小林京子
- 七位 田中弘子
- 八位 岡田宣子

表彰の後、予定の時刻通りに終了しましたが、参加人数が多かった事から選句や披講に時間をとられ忙しい進行を余儀なくされ、残念ながら主宰の講評を頂く時間が取れませんでした。これからは開始時間を早める必要があります。

何より、沢山の初参加があり、見事に主宰の超特選や特選に選ばれた他、互選の得点上位に入る快挙がありました。今後も初参加者がどんどん増えることを期待いたします。三極及び超特選、また、高得点を取られた皆様おめでとうございました。尚、互選による最高得点は山本主宰であったことを補足いたします。

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和八年三月三十一現在 —

椎野美代子	30	清水桂子	1	丸山マスマ	1
内田恵子	10	石関六弦	1	網野月を	1
霜多光代	10	菅原真理	1	野平美紗子	1
原田秀子	10	岡田宣子	1	伊藤美津子	1
水明忌より	5	春の吟行会より		西幅公子	2
森川義子	5			青木鶴城	2
日高道を	2	大塚茂子	5	日高道を	2
反町 修	2	茂木和子	3	大村節代	2
大塚茂子	2	越田栄子	5	梅澤佐江	2
梅澤輝翠	2	福田千春	3	星野和葉	2
小林京子	1	石井喜恵	2	平野 楽	1
平野 楽	1	森下美智枝	2	正木萬蝶	1
保坂翔太	1	小林京子	2	清水桂子	1
宮崎チアキ	1	石山かつ子	2	河野はるみ	1
河野はるみ	1	大場順子	2	菅原真理	1
梅澤佐江	3	石田慶子	2	綿引まりこ	1
丸山マスマ	2	保坂翔太	1	匿名	1
越田栄子	2	皆川更穂	1	鈴木和子	1
皆川更穂	2	染谷風子	1	合計	149
西幅公子	2	岡田宣子	1	口	口

若狭水明 春の特別句会

檜鼻ことは 令和八年二月二十六日

山本鬼之介主宰と網野月を副主宰を若狭にお招きし、春の特別句会と懇親会を庄司旅館で開催しました。

句会の兼題は、「恋をテーマにした一句」

出版社の辞書編集部を舞台に、新しい辞書づくりに取り組む人々の姿を描いた小説「舟を編む」（原作 三浦しをん）がありますが、映画化された「舟を編む」もととても素敵な作品でした。さて、映画「舟の編む」の劇中、「恋」の定義が紹介される場面があります。

恋

「ある人を好きになってしまい、寝ても覚めてもその人が頭から離れず、他のことが手につかなくなり、身悶えしたくなるような心の状態。成功すれば、天にもものぼる気持ちになる。」

恋が「相手を想う切なさや不安定さ」であるのに対し、愛は「相手を愛おしみ、相手のために良かれと願う心」と整理もされています。

参加の皆様が揃い、お陰様で和気あいあいとした楽しい句会となりました。

選者特選

山本鬼之介主宰

告白の心拍数や春嵐

森下風湖

二人きり桜月夜の鬼ごっこ

松村笑風

春しぐれ手と手触れ合ふ一つ傘

山崎郁子

恋人は今女房春日受く

網野月を

魅かれたる白衣のひとや梅の花

松宮保人

ふたり旅伊豆の湯けむり咲く梅と

島津初花

初夜と云ふ麗しき日や白障子

鳥羽和風

選者特選

網野月を副主宰

背に指の仮名の二タ文字春の浜
露味噲や苦み走つた彼が好き
告白の心拍数や春嵐

山本鬼之介
鳥羽和風
森下風湖

目を交はすだけのさよなら花辛夷
 春の昼ゆつたり話す妻とゐる
 二人きり桜月夜の鬼ごっこ
 恋といふ病に墜ちて冬夕焼け
 初夜と云ふ麗しき日や白障子
 春炬燵老婆の馴初め聞いてゐる
 春の宵偶然装ひ君を待つ
 魅かれたる白衣のひとや梅の花
 春まつり惹かれし人の撥搦き
 雪合戦あの子めがけて恋芽吹く
 春しぐれ手と手触れ合ふ一つ傘
 語らひて夕日を送る春の土手
 やはらかな足にふれるや堀ごたつ
 初恋や涙堪へて石鱗玉
 ふたり旅伊豆の湯けむり咲く梅と
 春の夢吉の文字浮く水神籤
 目を伏せし頬赤らめる冬紅葉

山本鬼之介
 倉谷重瑠
 松村笑風
 佐野友夏
 鳥羽和風
 飛永 鼓
 畠中風花
 松宮保人
 岡本祥子
 松島寛久
 山崎郁子
 西川夕月
 原田自然
 宇田春木
 島津初花
 檜鼻ことは
 松宮妙心



月を特選

主夫縁に憩ふひと時しだれ梅
少しづつ少しづつ春赤子立つ

鬼之介
和子

月を普通選

水軍の灘茫茫と丘の梅
入り彼岸君の笑顔を思ひ出す
露の臺ゆりかごの歌うたひ出す
残生やひかりの土筆ぼきと摘む
生け込み中ふくらんでくる桃の花
満作が刀自の離れを明るうす
寒明やゼロ番線のあるホーム
王将戦の旗に纏るる桜東風
「御自由に」使ふ膝掛け梅見茶屋
掌中のインコ看取るや春の雪

廻代
ノルン
和子
廻代
千世子
鬼之介
〃
廻代
人美
満耶子

当日欠席者の句

雛の間を真夜に入るのをふと怖る 道子
手をあげて踏切りわたる一年生 千枝子
風まかせペンペン草と自由人 嶋田洋子
恋猫の仲を割くかにクラクシヨ 智恵子

主宰、副主宰には前日の若狭水明会でお疲れのところ、続いて関西例会（大阪守口市）にお越し頂き誠に有難うございました。私達にとりましては、年に一度の大切な嬉しい句会です。入院中の方もあり全員出席とはなりませんでしたが、とても貴重な有意義な一日でした。又、お二人から銀座のリーフパイ、埼玉の彩果の宝石のお土産を、主宰から全員に短冊を頂き一同感激しております。有難うございました。

四時からの改装なつたばかりの日本鰻の店「豊りょう」での会食に大満足の夜でした。

今後共関西例会をよろしくお願いいたします。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

染め斑シズメの残る山襲春出水
大川を分かつ水開水温む
菜の花や夕陽に染まる園児帽
榮螺を生で馴染の店の角の席
水温む都をどりの幕開けに
江戸文字の染め鮮やかに春の寄席
動くもの見る子のまなこ水温む

卓郎 稀香 延昭 微平 卓郎 卓郎 稀香 喜恵 和葉 和葉 マスミ

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

花を観て花に染まりて帰りけり
草木染の和紙にて文をうららけし
朝ぼらけ見沼田圃の水温む
水温む沼面を染むる薄緑
水温み目覚めの一杯身に優し
恋に感染花咲くりラのしわざかな

加齢といふアドバンテージ春の星
平和のためのいくさ仕度よ星臙
もどる地の平和を願ひ雁かへる
瞬きは我の瞬き春の星
春星やふふむ金平糖の角
流水の間近に迫る無人駅
また一灯消えるを待ちぬ春の星
窓越しに小さく手を振り春の星

由紀子 順子 和子 千アキ 千祐 京子 峰雄 亜弥子 千春 敏江 笹仙 いちい

第三例会（東京）

五淵徹雄 昇報

握る手の冷えゆく記憶春の星
—以上特選—
みどり
少だけ遠回りして春の星
ホロ酔ひも一句ひねるか春の星
華金の良き菜良き酒春の星
帰る雁むかし出稼ぎてふ不在
まだそこに青春のあり日脚伸ぶ
青空と波音残し雁帰る
雁帰る列を外れる一羽二羽
ここは二人の終の住処よ雁帰る
春の星遠まはりする帰り道
鳥帰る君に届かぬ文を書く
春の星安寧の道修羅の道

以上特選
慶子 恵美子 妙子 千春 竺仙 敏江 いちい 峰雄 亜弥子 鶴城

陰膳や皿に青饅少し
ふるさとは御食つ国なり青饅食む

理恵 萬蝶



青餠やあくまで青き最上川
青餠をめて若かりし母のこと
入日影ふらここ漕ぐは風ばかり
ちんまりと青餠を盛る柿右衛門
青餠や愛敬あばたの若女将
水底の鯉の車座冴返る

順子 雅夫 徹雄 昇

中高に盛り青餠のかぐはしく
帰る雁細波残し棹を成す
読みはじむる「若紫」や春ともし
折詰の隅に青餠ほほゆるむ
末子はや青餠を知る年となり
青餠や老境諾ふこと多し
青餠や武骨な父の自作猪口
青餠の一箸を愛で若狭の湯
去り難き古き茶房や春灯

以上特選 理恵 星歩 順子 千祐 萬蝶 康世 雅夫 徹雄 昇

第四例会 (浦和)

生母養母義母と語らふ入彼岸
木曾馬の高き嘶き草青む
魔線の跡まつすぐに草青む
入彼岸小さき持仏に小さき花
草青む調子きづれとなる喇叭
お彼岸や苗字異なる三姉妹
決め球はスローカーブや草青む

石井喜恵 反町修報 昇 由紀子 章子 恵子 曆文 喜恵 以上特選

草青む土手に飲みかけ缶コーヒー
供花を挿し墓碑に囁く彼岸かな
草青むハイヒール等脱ぎ捨てて
お彼岸や新しき墓にぎにぎし
入彼岸卒塔婆の文字の読めぬまま
草青む境界線のあいまいに
じじはばの墓知らぬ子ら春彼岸
野の塚へ花を分けたり入彼岸
草青む土手に頬張る握り飯
草青む歩け歩けと医者声
低き丘やうなる古墳草青し
草青む土手に投げ出す泥の足

曆文 修太 翔太 延昭 恵子 行雄 由紀子 マスミ 昇 章子 喜恵

第五例会 (浦和)

張り詰むる神殿の巫女冴返る
砂利を敷く保線の音の冴返る
冴返る誰も帰らぬ門灯す
爪先に届かぬ温み冴返る
冴返る夜のサイレン咆哮す
舟泊りの音無き波や冴返る
鶯や耳をダンボに屋敷林

河野はるみ 岡田宣子 宣子 義子 千祐 知子 知子 以上特選 義子 千祐 知子

若松例会 (京橋)

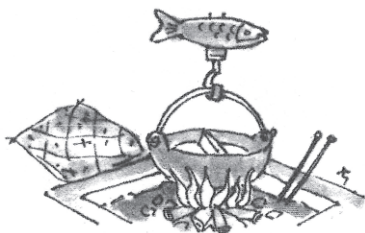
竹寺の天王笑むや春告鳥
鶯の声澄み渡る過疎の村
神門の奥よりしかと初音ケキヨ

夏野 宣子 正木萬蝶 石田慶子 報

春の雲内房の山越え行けり
流水来むかし駅舎のオムライス
おぼろ夜の内内と言ふ耳打ち
わだかまり溶けて流水離れ行く
猫と独りの家内安全のどかなり
境内の白梅越しに遠会釈
流水のきしむ夜はるかより訃報

以上特選 萬蝶 佐江 千祐 詠子 星歩 マスミ 鶴城 ひろこ 千春 邦人 慶子 萬蝶

各地句会



水明澤つくし句会 (大阪)

黒檀の螺鈿で手向く梅の花
御佛の前でゴスベル寒明くる
春一番雀四方に飛び立ちぬ
東風揺する祈願の札の音やさし

智恵子
人美
ノルン
洋子

柿の木塾 (浦和)

凍返るホース地にあり寡黙なり
丹田に力を込む寒戻り
凍返る土魂凄まじ血天井
滾りつつ流るる溪や藪椿
凍返る鯉は暫しの深眠り
にぎにぎし鳥語聞さるる紅椿

若楠句会 (浦和) (4月号分)

春隣メタセコイアはトトロの木
声色の自在なインコ春隣
菩提寺の朱塗の門や春近し
真白なる車汚すや寒鴉
寒鴉老人だけの村の黙
壁に蹴るサッカーボール春隣
旅立ちの二頭に幸あれ春隣
暇な老相手せんとす寒鴉
絵手紙に拙句を記すや春近し
青空に影絵となりし寒鴉
何故に敵となるや寒鴉
寒鴉静かに暮るる宿場町
補助輪を外した子の目春隣

芽吹句会 (浦和)

蒼天を画布となしたる梅の花

和葉 節代 かつ子 章嘉 和子
葉操 京子 慶子 文子 久美子 宏治 風舎 弘子 鶴城 直子 真由美 玲子

梅の花大和心を呼び戻す
春浅し水底の鯉徐行せる

梅が香や手作り壺に溢れをり
ミニSL触れむばかりに枝垂れ梅
浅春の街まぼろしの靴磨き
古来より愛でられし花梅の花
雨催それも嬉しと梅の花
病室の窓に人影梅月夜

小梅の会 (浦和)

春寒や出張先の会議室
張り紙に臨時休業春の雪
柚家に賑はひ戻る猫の恋
蹴り上ぐるサッカーボール春の風
張りつめて発表を待つ春の朝
春めくや秩父連山影を増し
たかな俳句会 (川口)
勝者には成らずともよし紙風船
水位計の水のゆらぎや春疾風
ベダル漕ぐ我武者羅に漕ぐ春一番
夕闇や今は静かに梅見茶屋
木瓜の花母の近頃何者か
天神に溢るるお願梅見茶屋

千重子 修 富子 弘子 ひろこ 久美子 千アキ 道 隆文 隆然 恵子 啓子 道 進 隆文 隆然 恵子 啓子 道 鶴城 たいみ

青葉の会 (浦和)

吹きまくる春北風に樹々叫びをり
「実はね」と言うて泣かるる春の宵
春北風や高校生あの時も
園庭を春北風走り児も走る
春北風が通り抜けるや長屋門
オリブの実り待ちある春の朝
春北風や飛ぶ干し物に犬じやれて
春北風や北前船も軋みしか
春北風やマラソン中止空仰ぐ
おしやれして出かけたけれど春北風

久美子
桂子
美紗子
真理
美智枝
公子
美子
啓子
洋子
輝翠

若鮎句会 (浦和)

みどりこのねいきうすらひとかすかな
猫の夫恋の名残に爪のあと
蒼天へ枝先赤み初音まつ
うららかに残り香たゆたふ朝のバス
吾子の口ママと聞ゆる初音かな
旧家継ぐ君は越後へ春水
うすらひを踏めばゴジラの心かな
薄氷へ踏み出す今朝の一步かな

ひとみ
山菜
真貴
秀子
芳春
月を
喜夫

神戸大池句会 (神戸)

梅が香や人波散らす鳩の群
早春や山に気の満つ日一日

千津子
早苗

和歌山水明句会 (和歌山)

初音かと耳すましをり伎芸天
下校児の帽子にふはり春の雪
化粧して証明写真チューリップ
強東風や鳩みな同じ体勢に
立春や明るき声で踏む祖國
湖の厚き氷に天使の舞
腹這ひの三人覗く東風の崖

和子
千枝子
千世子
満耶子
きわゑ
洋子
廻代

春寒や垣根の奥のソプラノ
結局は元の投げ入れスイートピー
新樹の会 (浦和)
陽を弾く氷の上の桜魚
のどけしや膝に猫置き国自慢
幻聴の「予科練の歌」桜魚
公魚や浦の苦屋に帰る船
乱世にも変はらぬ自転春浅し

美仁
修
徹雄
風子
道を
鶴城

なごみの会 (浦和)

料峭や外科医向きなる次男坊
一碗に浮かす手鞠麩春立ちぬ
分校の今年限りや春寒し
この頃の歩幅小さし春寒し
外洋の国旗無き船春北風

和葉
茂子
かつ子
喜恵
節代

あんのままの生家か春灯
カール美し西洋人形春の燭
朝からの喜雨のいちにち木の芽張る
春ともし影やはらかに壺の花
人待つも豊かな時間春灯
再会のシャンペンに透く春灯
雑木の芽あなたの夢はなんですか
源氏の君のあらはれさうな春灯
木の芽風つくづく狭くなる歩幅
春灯小さき壺に少女の絵

和子
和葉
かつ子
喜恵
マスマ
昇
恵子
史代
広子
節代

越後の会 (浦和)

薄氷を舐むるのら猫瞬さす
秋ヶ瀬の川風緩み土手青む
立春の風に輝く波頭
薄氷や大口透くる池の鯉
隠沼へ射す光芒や薄氷

輝翠
知子
真理
宣子
翔太

めだか句会 (浦和)
色褪せどなほ清らなる雛の顔
近隣の友と春呼ぶバイオリン
石段に並ぶ雛や雲を突く

美津子
道代
和子

芙蓉句会 (浦和)

一人には広すぎる部屋春寒し

税子

紙籬の眉は三日月紅差して
延々と覗く人夫とせし

オトタテテ覗をあらふ明日を磨ぐ
味噌汁に薄紫の覗汁

近すぎて見えぬものあり春の泥
籬飾る空箱もとに戻しつ

春めきてさよなら近し段ボール
雛祭幸せ祈る老夫婦

白みそは母の直伝覗汁
足踏みのオルガンの音や雛祭り

若枝句会 (浦和)

桜魚富士伏流に育まれ

剪定し陽射しあまねく果樹の里
公魚や湖水の下に眠る村

べペロンチーノ風わかさぎ炒め昼の卓
剪定の切りたての口潔し

櫛の会 (浦和)

地に潜む温さに押され草萌ゆる
さかだちの練習えいっ」と下萌ゆる

下萌えの今が好機と旅心
つくばひの薄氷すぐに失せにけり

薄氷や水底の影ほぐれけり
子が一人踏めばも一人薄氷

章嘉 尚己 真美子 莊志

六弦 惠美子 妙子

月を 知子

みどり 泰子 貞代

敏江 泰生

知子

みどり

泰子

貞代

敏江

あつ子 朋子 裕誌

富子 文子

千重子

蘭の会 (浦和)

言祝ぐや満百歳の花の宴
制服のポケットに挿す桃の花

風一陣野焼の音のそこかしこ
存ふや今年また見る桃の花

遠き日の五感いざなふ野焼かな
婚す子に幸あれと桃の花

嫁ざし娘思ひて活くる桃の花
南仏のミモザ満つ村白ワイン

見極むる縁の真つ直ぐ堤焼く
仙郷や朝湯朝酒桃の花

干満の潮に踊る雛かな
俳句の手ほどき (岩槻)

梅東風やお国訛りの陶器市
湿原の漣まぶし蘆の角

しなやかに春風を押す太極拳
風光る山のあなたの青い鳥

八十過ぎの初めてのヨガ長閑なり
ありし日の「草原情歌」春うらら

山や川春の目覚めの音きこゆ
ものの芽の見え隠れして川光る

荒れ家静もり梅の天蓋ありにけり
長竿のさぐる海石や若布刈舟

熊谷の川幅広したんぼぼ野

風子 夕峰 寿夫

和子 さよ子 伸子

小麥 まりこ

京子 月を

風舎

延昭

延昭

延昭

延昭

延昭

延昭

延昭

延昭

麗かや雨後の茅葺屋根の湯気
春の雨鈍色の幹頭なり

春の虹湯浴みの稚を手渡しに
りそな俳句会 (浦和)

陽炎にまぎれて遊ぶランドセル
陽炎が眠気を誘ふ昼さがり

陽炎に笛吹童子やつて来る
陽炎に揺る単線一輛車

霊峰を見せつ隠しつ雪解靄
山間の村から村へ雪解風

山茶花 (浦和)

風光る送迎バスの窓全開
稚魚放流の野外学習風光る

あゆみの会 (浦和)

一欵に早春の土匂ひ立つ
早春の華展は黄色あふれをり

早春の谷中界隈ぶらぶらと
植木鉢並べて待てり春早し

銀鱗の踊る公魚竿の先
公魚釣り穴を覗けば我が影が

鶴川山百合句会 (鶴川)

つくばひや余寒の水を震はせて

翔太 千アキ かつ子

勲 久美子 建治郎

道 道

マスミ 雅夫

美江子 マスミ

美江子

美江子

美江子

美江子

美江子

美江子

美江子

美江子

券売機喋る余寒の無人駅

柿釉の器重たき余寒かな

聴診器に驚かざる余寒かな

余寒なほ寂しさのなほ七七日

公園の日差し惑はす余寒かな

風強しぬくもり速き余寒かな

幸せのレシビに余寒ひとつまみ

城壁に残る銃痕余寒かな

野ばらの会 (浦和)

蝌蚪泳ぐ一心不乱に泳ぐ蝌蚪

小流れに陽のたつぷりと蝌蚪生るる

創造の神に脱帽蝌蚪の紐

春シヨール彫刻の森ゆるり行く

春シヨール母の匂ひと話す朝

櫻蔭句会 (浦和)

ものの芽や流れ緩やか信濃川

ものの芽や祈りのかたちより開く

ものの芽や夢に溢るる大講堂

春の小屋乳を取り合ふ子豚多多

細き枝多く残りし雁供養

雪氷の五輪数多の物語り

春の庭夫の形見の多年草

春光に煌めく九輪多宝塔

当て字ばかりの名札の多き植木市

広子

千春

萬蝶

理恵

美千子

うさぎ

まじか

玲子

茂子

栄子

秀子

夏江

みさ子

ものの芽の青し踏まれ踏まれても

雨後の紅数多輝き花椿

ものの芽や去年を脱ぎ捨て仰ぐ空

ミモザの会 (横浜)

春の闇補聴器よりの水の音

ほろ酔ひのコロッケ一つ春の闇

歌姫の天折知るや春の闇

わらべ地蔵のただ寄り添ひて春の闇

枝折り戸の密かに開く春の闇

春の闇パンダの消えし動物園

春星のしづくのやうな汝は倭子

春の闇貝は口開け砂を吐く

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

若布刈舟艦で舵取る漁師妻

船盛りの船先あしらふ青若布

ぶらんこの三歳に説く順番こ

修験者の脚半に跳ぬる春の泥

若布干す海神祀る漁師町

爪皮も軍靴も遠し春の泥

りんどう俳句会 (浦和)

秩父路の太古は海よ土筆つむ

春暁や置き忘れられ太白星

春暁や産声高き助産院

千恵

真理

幸代

栄子

慶子

詠子

玲子

亜弥子

萬蝶

史代

千春

春暁に誘はれ起くる日課かな

蒼天をゆする輝き白木蓮

春暁の出船に妻の握り飯

合ひし駅別れし駅や春の朝

春炬燵かつて茶の間に「宮田輝」

清輝享けたる座主開帳の弥勒像

皐月の会 (浦和)

秋子の忌椿となるにまだ硬き

軽やかな春外套のルポライター

トレンチの団十郎のスプリング

駅で弾くピアノに光る春の塵

花まつり鰻も旨し成田山

ものの芽の閉ざす閑所の冠木門

雛の会 (浦和)

戒名に俳号入り春の星

ちりぢりの蝌蚪に水曲の隠れ場所

手の届く幸ある予感春の星

亡き友へ風の電話す春広野

我れ先に母を捜すか蝌蚪の群

春昼や書架に名主の広辞苑

春の空飛んで行きたい大広野

春の星潤む前触れなき訃報

夕峰

徹雄

まりこ

寿夫

風子

卓郎

山菜

光代

珪子

文

きいち

更穂

はるみ

喜恵

燈女

公子

輝翠

桂子

チアキ

佐江

蝸 蝸 の 会 (浦和)

森陰に鷹と鷲待つ春田かな
春の田へ水踊り出てスタートす
荒川の水を呼んでる春田かな
のどけしやほろりほじける黄身しぐれ

首塚をきつと取り巻く春田かな
繁榮と光る櫻樹や友を待つ
故郷の春の野行かば光降る
長閑なる月に一度の休刊日

白球の光おひかけ風光る
老猫のごとき夫あて長閑かな
夕照に越の春田の輝けり

野 菊 の 会 (与野)

生涯の終の思慕なり牡丹雪
春の雪盛ん突然爆破音
菜の花やビルに囲まれ光放つ
平凡を守るは難し春の雪

参道の此処はれやかに河津桜

さざきサークル (浦和)

まんさくに始まる陸奥の花暦
まんさくや村ゆつたりと動き出す
金縷梅や朝の光をふりこぼし
身をたてて餌を欲る魚や水温む

夏 野
五 郎
ひさの

秀 子
風 舎
礼 子

元 美
幸 子
月 子

宣 子
和 子
清 子

恵 子
光 子
美代子
和 子
清 子
恵 子
光 子

母鳥は羽ばたき指南水温む
水温むほのかに匂ふ川の面
線あらば上を歩く子水温む

若狭水明会 (若狭)

荒鋤のままの田圃や初景色
麗しき若狭の御空初景色
門松の葉先に光る朝日かな
門松を飾りて背筋伸したる

門札著しばし讃岐の歌碑の前
切り口が邪気を吸ひこむ門の松
三本の削ぎ竹笑ふ飾松
鳥羽谷へ瑞鳥舞ふや初景色

初景色僧侶の息の白きかな
百年の戸口際立つ松飾り
松飾り男女と言ふ決まり
真つ白な産着の赤児初景色

見なれたる里も輝く初景色
山の端の瑞気漂ふ初景色

水明熊谷句会 (熊谷)

包丁の研ぎ師の気合寒明くる
剣客は枡で酒飲み蜆汁
寒明や書齋を覗き込む鳥
山襷の紫立ちて寒の明け

まんさくの花掃いても掃いても

由美子
和 子
和 子

郁 子
こ 子
鼓 子

和 風
寛 久
笑 風

自 然
保 人
友 夏

夕 月
風 花
初 花

祥 子
風 湖
燈 女
風 子
徹 平
秀 子
忠 男

熊谷へ千客万来春句会

山里の一番鶏や寒明くる
のどけしや客待ち顔の招き猫
熊谷宿へ旅客の気分うらけし
まんさくに地藏真紅の漣掛け

若 楠 句 会 (浦和)

じゃれ合ひて光遊ばす猫柳
露座仏のまろき背中や猫柳
猫柳遙かミラノに喝采を
生け花や高き位置取る猫柳

春時雨鱈の干物の売切れて
駅中の人待ち顔や春時雨
心地よき春の時雨や道祖神
バス停に袴姿や春時雨

春時雨喜怒哀楽の競走馬
春時雨駅へと急ぐハイヒール
少年の語る宇宙や猫柳

京 子
久 美 子
葉 子
慶 子

弘 操
風 舎
鶴 城

真 由 美
直 子

茂 子
栄 子
道 太
卓 郎

☆ ☆

☆ ☆

風 声

○現代俳句三月号「第一回現代俳句年鑑2026を読む」欄
畦田恵子氏の感銘十句抄に

AIは物質名詞泡立草

網野月を

○現代俳句三月号「第二回現代俳句『風を詠む』欄

「予科練」を伊達に歌ふや余花の風

菊池ひろこ

バカラにワイン信楽焼に田螺和

池田珪子

花明り笑顔で帰る語り合ひ

小駒さち子

酒屋や枺に塩盛る粹な人

小林京子

己が摺る山葵にむせぶ蕎麦処

五明 昇

春疾風モンローばりの女学生

反町 修

念入りにみがく手鏡花ぐもり

原田 秀子

ひもすがら胎動めきて春の海

本橋 稀香

○くちら（中尾公彦主宰）三月号「受贈俳誌美術館」欄
想へば愉し冬満月に月の姫 鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）二月号「受贈誌紙お礼」欄

白魚や錫の銚鰲が売りの店

鬼之介

街騒を遠まきにして社会鍋

井上 燈女

喘息の宿痾の妹や冬日和

清水 桂子

○こんちえると（関根道豊版元）三月号「受贈誌紙お礼」欄
道産子の人馬一つになる雪野 鬼之介

かなしびは十二月八日の青春

永野 史代

社会鍋「異国の丘」の手風琴

近藤 徹平

こぼれ落つ花終の夜を匂ふ

清水 桂子

北風見沼田圃を舐め行けり

反町 修

○好日（高橋健文主宰）三月号「受贈誌御礼」欄

相傘の人の背丈や夕時雨

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）三・四月号「他誌拝見」欄

水神の眠る湖底ぞ初霞

鬼之介

○菜の花（平賀節代主宰）三月号「諸家近詠」欄

明眸の見据うる的や弓始

鬼之介

○笥（山本一步主宰）三月号「受贈誌の一句」欄

秋雨や水棹の音も消しにけり

倉田 星歩

（日高道を抄出）

誌代・同人費のお支払いのお願い

今月号に誌代・同人費のお支払いの為の郵便振替依頼書をお送りいたしましたので、ご利用ください。

誌代は前納をお願いいたします。

尚本年一〇月以降までお支払い済の方には郵便振替用紙は同封しておりません。

水明俳句会 総務部

令和8年 水明全国大会・懇親会のご案内

令和8年水明全国大会を下記の通り開催いたします。誌友・同人・季音同人の皆様には、お誘い合せの上奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

■令和8年水明全国大会

日 時 令和8年6月28日（日曜日）
受付開始11時30分 開会12時 閉会17時00分
会 場 さいたま共済会館 6階 601号室／602号室
〒336-0064 さいたま市浦和区岸町7-5-14 TEL 048-822-3330
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰、新誌友・新季音同人・新同人の紹介、大会兼題入選句の発表と表彰、講評等。

■水明懇親会

日 時 令和8年6月28日（日曜日）
受付開始17時00分 開会17時30分 閉会20時30分
会 場 さいたま共済会館 6階 601号室／602号室
行 事 アトラクションなど

■参加費

令和8年全国大会・懇親会	10,000円
令和8年全国大会のみ	3,000円
懇親会のみ	7,000円

■申込締切

令和8年6月5日（金曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

※欠席の場合は必ずご連絡をお願いします。

連絡先：青木鶴城 090-6709-1367

令和8年水明全国大会実行委員会 実行委員長

後記

五月号をお届け致します。

水明はこのところ立て続けに句友を喪いました。二月には、熊谷句会の立ち上げに貢献されて、かつては季音花欄作家でいらつしやうた福田藤十郎さんが亡くなられました。体調がすぐれずに投句を控えておられましたが、水明誌のご購読を続けておられました。同じく二月には季音雪欄作家の小倉倭子さんが亡くなられました。体の調子に合わせながらの作句を続けておられたように拝察しておりましたが、筆者にとっては急なことでありました。三月には季音雪欄作家の井上燈女さんが亡くなられました。気丈な方で、最後まで自立しておられたと伺っております。

ここに三人のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

暗いニュースばかりではありま

せん。水明ではいわゆる水明六賞の選考会が三月に行われて、水明

賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の各受賞者が決定

しました。受賞者名、および審査経過などは誌上の通りです。今後

の毎月号で受賞者のページが展開されますので、乞うご期待です。

ところで、今年の桜の季節も過ぎようとしています。皆様はどの

ように桜を観賞されたでしょうか。熊谷での春の吟行会の桜は如何だ

ったでしょうか。桜は咲くとそこに桜樹があつたということを改めて

思う、とある俳人が仰つていました。

芭蕉句に「さまざまな事思ひ出す櫻かな」があります。筆者は今年

の桜を見損ないました。芭蕉句の逆説ですが、今年の春の事々は

桜に紐づけて記憶に残らないという

ことでしょうか。そういう事もまたあるのです。(月を)

今月のはてな？

重種馬(じゅうしゅば)

栄螺(さざえ)

潦(にわたずみ)

鯨東風(さわらこち)

漣(さざなみ)

巾の糸(きんのいと)

金縷梅(まんざく)

強(あなが)ち

蹠(みずかき)

存(ながら)ふ

73 39 28 ♪ 19 18 ♪ 16 14 9 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和八年五月号

通巻一四八号

令和八年五月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

令和8年「水明全国大会・懇親会」 6月28日(日)

参加申込書〈申込締切 6月5日(金曜日)〉

全国大会・懇親会共に参加	参加費 10,000 円	出席します
全国大会のみ参加	参加費 3,000 円	出席します
懇親会のみ参加	参加費 7,000 円	出席します

参加費 _____ 円

※「出席します」を○で囲んで下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2026 年 月 日

住 所 〒			
氏 名		電 話	

申込書送付先

〒330-0064

さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

[緊急連絡先]

電 話 番 号	—	—
氏 名		

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。

緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

※欠席の場合は必ずご連絡をお願いします。

連絡先：青木鶴城 090-6709-1367

季音抄

山本鬼之介

決め球はスローカーブや草青む
弧の伸びを空に描きし初燕
声のよき尼僧の経や薄紅梅
水軍の灘茫茫と丘の梅
句作りに十指用ゐる春の宵
浅春の街まぼろしの靴磨き
青饅やあくまで青き最上川
依代の杉の古木に雪解光
鳴き声を知らぬ狛犬日脚伸ぶ
境内の白梅越しに遠会積
薄雲に垣間む神話春の星
春暁や水平線の向う側
友禪を晒す水音雪催
春帽子置かれしままに幕が開く
目を入るる必勝だるま竜天に
少しだけ遠回りして春の星
実力を出し合格の花トネル
春霖の城に家紋の丸瓦

石井喜恵
井上燈女
石山かつ子
大橋廸代
大村節代
菊池ひろこ
大場順子
丸山マシミ
曲淵徹雄
梅澤佐江
河野はるみ
池田雅夫
池田珪子
渋谷さいち
染谷風子
石田慶子
梅澤輝翠
菅原卓郎

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

廢道に庚申塚の凍つる後夜
 野仏に夕日のあたる雪野かな
 春日射す普段届かぬ書斎まで
 口紅の折るる酷寒今朝の黙
 寒鰯や波の泡舞ふ日本海
 絵馬にあるアラビア文字や初詣
 青空に鱗薄氷にピンヒール
 触れたれば心幼に猫柳
 冬の夜や息子の遺影にらむ吾
 春蘭や生まれし杣を焦がれ咲く
 母のぼる天使のはしご春隣
 猫二匹沈丁の香にまどろみぬ
 春立ちぬ声の限りの朝稽古
 灰色の街を俯瞰の寒鴉
 弾初は「春の海」より音合はず
 頂上の見えて道なし冬の山
 野焼かな戦国武将の影揺らぐ
 擬宝珠に集まる光初日の出

皆川更穂
 反町修
 倉田星歩
 阿部幸代
 寺町知子
 田中弘子
 森下山菜
 丸屋詠子
 飯田忠男
 岡本祥子
 平野 楽
 綿引まりこ
 川島夕峰
 菅原真理
 岡田宣子
 小林京子
 霜多光代
 畑宮栄子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅小 原林 卓京 郎子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中木 どり 鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 淵 昇 曲 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜 恵 反 町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野 是 宣 田 宣 子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石 田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和八年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第五号)

定価 一〇〇〇円